# 名古屋城調査研究センター　年報３

## 令和３年度

２０２２

名古屋城調査研究センター

# 目　次

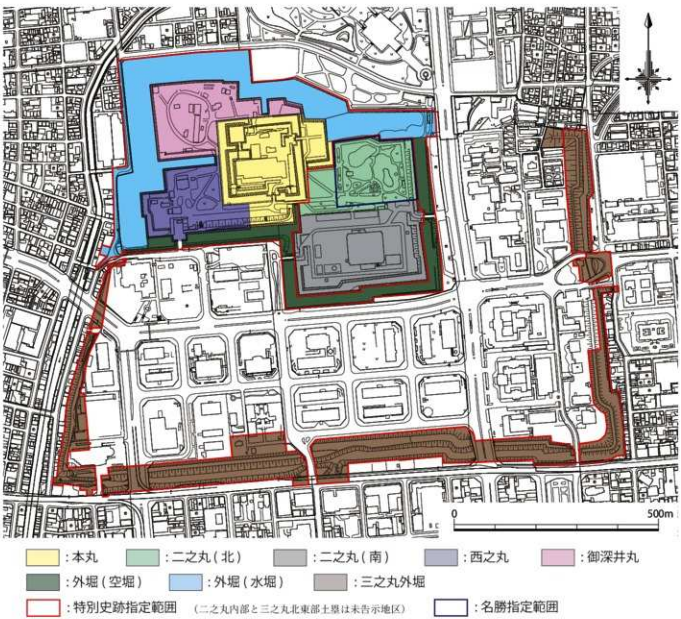
Ⅰ　調査研究事業 …… 1
1　発掘・試掘調査 …… 2
（1）天守閣等地盤調査　（2）本丸搦手馬出周辺石垣解体修復事業に伴う発掘調査　（3）二之丸庭園第９次発掘調査
（4）西之丸発掘調査　（5）天守台穴蔵石垣試掘調査　（6）二之丸地区試掘調査
2　石垣調査 …… 15
（1）石垣カルテの作成　（2）石垣および地中レーダー探査（3）城内石材確認調査（4）本丸石垣現況調査
（5）名古屋城内石垣安定性調査
3　工事立会 …… 21
（1）二之丸庭園修復整備工事に伴う立会　（2）正門便所改修工事の立会
4　資料調査（文書典籍・美術工芸） …… 23
5　デジタル化事業 …… 25
（1）名古屋城史跡等管理システム　（2）名古屋城関係資料データベース
Ⅱ　資料管理 …… 26
1　所蔵資料・受託資料の概要 …… 26
（1）所蔵資料　（2）受贈資料　（3）受贈・購入図書
2　資料の修理 …… 27
（1）名古屋城旧本丸御殿障壁画保存修理事業（2）余芳亭障壁画（3）昭和金鯱
3　資料の移動 …… 28
4　資料の利用 …… 28
（1）資料貸出　（2）写真貸出　（3）熟覧
Ⅲ　展示事業 …… 29
1　西の丸御蔵城宝館 …… 29
（1）プレオープン特別企画「鯱展」（2）開館記念特別展「名古屋城誕生！」（3）企画展「武家の備え」
2　その他 …… 43
（1）名古屋城刀剣展－尾張に伝わる刀剣－
Ⅳ　教育普及事業 …… 44
1　刊行物 …… 44
（1）名古屋城調査研究センター研究紀要　第３号　（2）名古屋城調査研究センターだより　第３号
（3）西の丸御蔵城宝館開館記念特別展「名古屋城誕生！」リーフレット
（4）史料が語る　名古屋城石垣普請の現場〔名古屋城調査研究報告書３・資料調査研究報告書１〕
（5）名古屋城調査研究センター年報２　令和２年度
2　レファレンス …… 45
3　シンポジウム・座談会 …… 45
（1）シンポジウム「史料が語る　名古屋城石垣普請の現場」
（2）座談会「名古屋城本丸御殿障壁画≪雪中梅竹鳥図≫の復元から考える
～文化財の「復元」とは？歴史資料から何が読み取れるか？～」
（3）シンポジウム「石垣が語る東海のお城」
4　講師派遣 …… 47
Ⅴ　組織と職員 …… 48
Ⅵ　参考資料 …… 49
1　名古屋城の活動 …… 49
（1）催事等　（2）特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議
2　入場者数の推移 …… 50

# Ⅰ　調査研究事業

名古屋城調査研究センターは、考古学・歴史学・美術史などの分野を横断した総合的な研究を推進し、特別史跡名古屋城跡の保存・活用を進めるとともに、その調査研究成果を広く情報発信していくことを目的に令和元年（2019）4月に設立された。

令和3年度は、考古学分野では本丸・二之丸・西之丸の発掘調査や石垣調査を実施し、歴史学分野では慶長15年（1610）名古屋城築城時の諸大名による石垣普請に関連した歴史史料の収集と分析に取り組んだ。

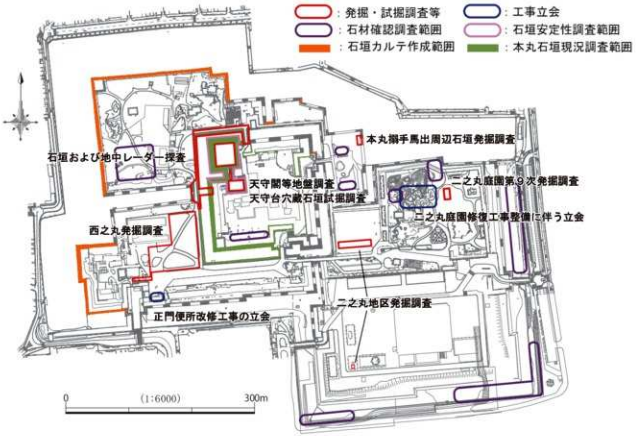
その成果は特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議等にて報告するとともに、『名古屋城調査研究センター研究紀要』第3号等で発表した。




名古屋城の地区区分

## 1　発掘・試掘調査

調査位置図




### （1）天守閣等地盤調査

調査期間　令和３年６月 14 日（月）～ 11 月 12 日（金）

調査地区　本丸地区

調査面積　―

調査目的　天守台石垣保全のための地盤情報収集等に伴う調査

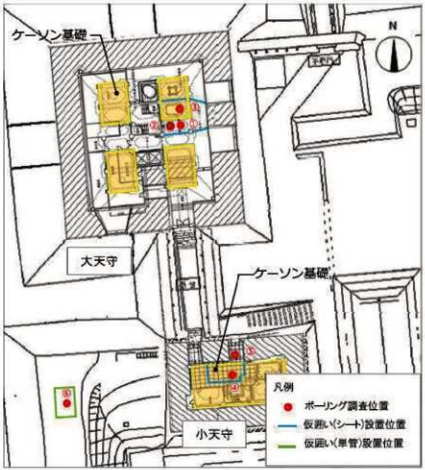
立会担当　二橋慶太郎、木村有作、西本茉由、大西健吾

調査概要

天守台石垣の保全のための工学的視点からの検討及び、今後の整備のために必要な地盤情報等を得ることを目的に、大天守内で３か所（調査番号①～③）、小天守内で２か所（調査番号④～⑤）、地下遺構面の深さを把握するため小天守西側で１か所(調査番号⑥)、計６箇所でボーリング調査を実施した。調査は株式会社竹中工務店、株式会社東京ソイルサーチが実施し、調査中は名古屋城調査研究センター学芸員が立会いを行った。

調査内容としては、調査番号⑥を除くすべての調査地点で標準貫入試験を実施したほか、調査番号①では工学的基盤の確認及び PS 検層を、調査番号②、④、⑤では土質試料採取を合わせて行った。調査番号⑥ではオールコアによる土質試料採取を行った。

以上の調査により、今後の工学的視点からの検討等を行っていくための基礎資料を収集できた。調査番号⑥では表土直下に濃尾地震に伴うと考えられる近代盛土（標高約 20.0m-16.2m）、その下に近世盛土（標高約 16.2m- 標高 1.1m）を検出した。標高約 1.1m 以下には地山（熱田層）が堆積する状況が確認された。




調査位置図

調査写真

大天守調査番号③における調査風景

小天守西調査番号⑥における調査風景

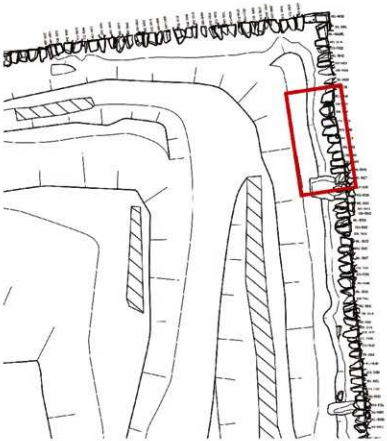
## （２）本丸搦手馬出周辺石垣解体修復事業に伴う発掘調査

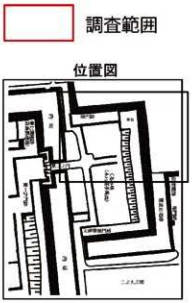
調査期間　令和４年１月２５日（火）～３月３１日（木）
調査地区　本丸地区
調査面積　80㎡
調査目的　本丸搦手馬出周辺石垣解体修復事業に伴う発掘調査
調査担当　西本茉由、木村有作
調査概要

令和３年度の本丸搦手馬出周辺石垣解体修復事業では、平成 30 年度工事において搦手馬出東面石垣最下段で確認された逆石状に積まれた石材の解体を行った。石材の解体を行うにあたり、石垣背面を掘削する必要があったため、調査及び記録の作成を実施した。

土層断面図を作成するために一部トレンチ状に掘り下げた結果、水堀側からの流入土であるヘドロ状の土の下に、栗石とともに黄褐色の粘質土が堆積する状況を確認した。またトレンチ内において栗石の調査を実施した。栗石の調査の結果、築城期には大ぶりの養老産砂岩が用いられ、天和２（1682）年の修復時に直径 10㎝未満の河川礫が用いられたと考えられる。

今回の調査では、築城期の築石とみられる２石に烏帽子か鎌とみられる墨書を確認した。加えて１石には花押のような墨書も書かれていた。墨書を確認した２石は現地に残置している。今までの調査で確認されていた墨書は数字が主であるが、文様のような墨書も一部存在した。数字は天和２（1682）年の積み直しの際の新補材とみられる石材のみでみられるが、文様のような墨書は刻印の下書きと考えられてきた。今回の調査で墨書が確認できた２石は取り外されたことがない石材であるため、刻印の下書きに墨書を用いたという説を補強できるものと考えている。






令和３年度搦手馬出周辺石垣発掘調査　調査範囲

調査写真

調査風景（南から）

墨書（花押か）（北から）

（3）二之丸庭園第９次発掘調査

調査期間　令和３年９月６日（月）～ 11 月９日（火）

調査地区　二之丸（北）地区　二之丸庭園（東庭園）

調査面積　160㎡

調査目的　二之丸庭園整備に伴う調査

調査担当　木村有作、花木ゆき乃、高橋圭也、大村陸

調査概要

二之丸庭園内にあった茶席「余芳」東側における近世遺構の残存状況の確認を目的に行った。調査区の規模は東西 10m、南北 16m で、第３次（2015 年度）発掘調査区の東端に 1m ほど重なるように設定した。

基本的な層序は、調査区北半では表土―昭和の公園造成土―現代硬化面―近代遺物包含層―（黄色粘質土面）―玉石面である。黄色粘質土面は調査区北東で玉石面上面に乗っている。調査区南半では表土―昭和の公園造成土―現代硬化面―近代硬化面である。

主な検出遺構は玉石面と景石、瓦溜りである。

玉石面の南北端には直径 40 ～ 130cm の景石が据えられている。景石抜き取り痕も確認した。玉石面の東西端は調査区外に広がっていくと考えられる。

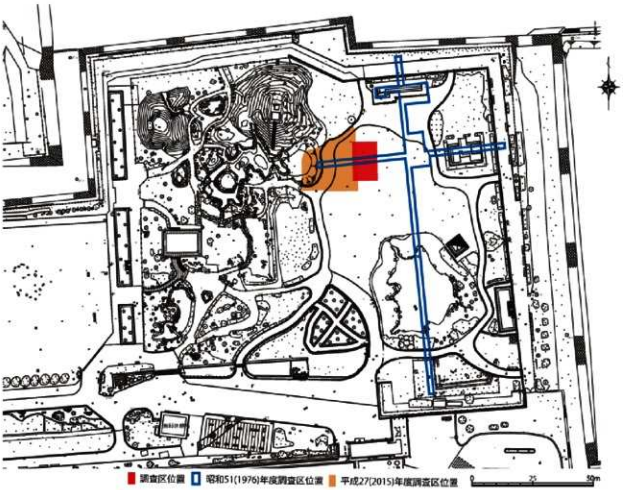
西側玉石面上面からは幕末～近代にかけての遺物が出土したため、西側玉石面は近代にも露出していたと考えられる。一方で、東側玉石面は直上に黄色粘質土が約 30cm の厚さで堆積している。黄色粘質土上面からは幕末～近代にかけての遺物が出土したため、東側玉石面はすぐに黄色粘質土が盛土され、露出していた時期があったと考えられる。玉石面下層は地山(熱田層）だが、一部で地山（熱田層）を切った瓦溜りとなっている箇所があった。

玉石面は景石が据えられた範囲内に広がる遺構であることから、池もしくは川のようなものと考えられるが、玉石面の下層は砂シルトの地山（熱田層）もしくは瓦溜りのため、保水機能は期待できない。一方、景石同士を漆喰で接続している箇所もあったため、枯池と断定することはできず、遺構の性格も含めて今後の検討課題である。

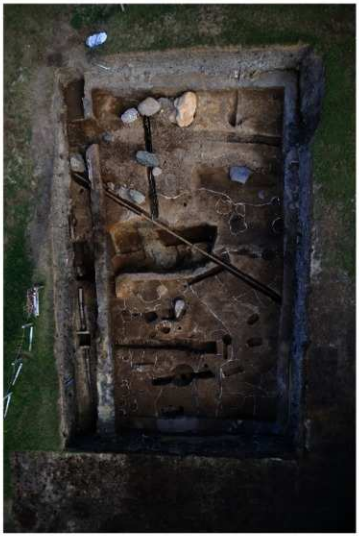
玉石面と景石は『御城御庭絵図』には描かれていない。遺物の様相からも『御城御庭絵図』成立以降に造られたと考えられるが、時期の確定には至っておらず、今後の検討を要する。

調査区南半は近代以降の改変により、近世の遺構面は一部で確認できたのみである。

余芳東側における近世遺構の残存状況の確認を目的とした今回の調査では、文政期の庭園遺構はほとんど削平され残存していないことが明らかになった。




発掘調査位置図 [1976 年調査区あり ]



調査区全景（写真上が北）

玉石面と景石（南西から撮影）

（4）西之丸発掘調査

調査期間　令和４年２月 14 日（月）～３月 31 日（木）（令和４年７月 31 日まで〈予定〉）

調査地区　西之丸地区

調査面積　1,045㎡

調査目的　西の丸御蔵城宝館の外構整備のための発掘調査

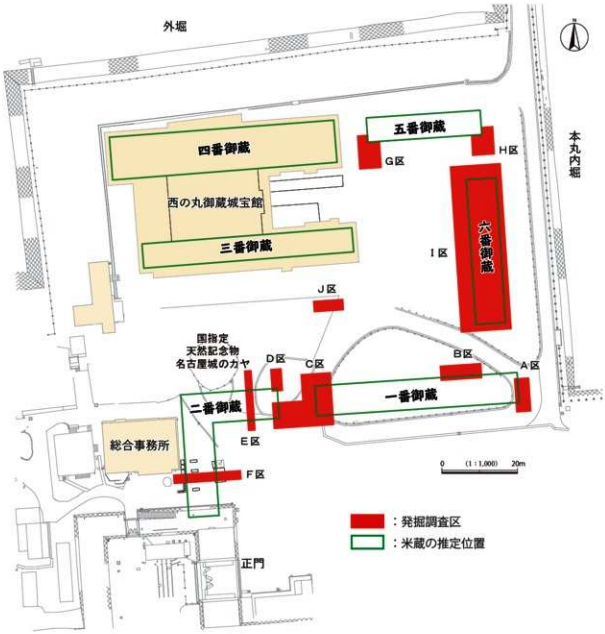
調査担当　酒井将史、瀬﨑健、大村陸

調査概要

江戸時代に名古屋城西之丸に建てられた六棟の米蔵（一番御蔵～六番御蔵）のうち、三番御蔵・四番御蔵については重要文化財等を展示・収蔵する施設（西の丸御蔵城宝館）として外観の復元が行われている。他の４棟の米蔵についても、遺構の平面表示等の整備を行うことを計画しており、それに先立ち米蔵の位置や構造等を把握する目的で発掘調査を実施した。調査区は、一番御蔵（Ａ区～Ｃ区）、二番御蔵（Ｃ区～Ｆ区）、五番御蔵（Ｇ区・Ｈ区）、六番御蔵（Ｉ区）、水路（Ｊ区）の範囲確認等のために計 10 箇所設定した。

六番御蔵の調査（Ｉ区）では、東・南側の端の礎石（跡）や地覆石を検出し、建物の位置を把握することができた。また、礎石等を据え付けるための布掘りの地業や礎石の抜き取り痕跡を検出したことで、柱の配列についても確認した。

発掘調査は令和４年度まで継続して実施する予定であり、他の米蔵の調査内容については、令和４年度の年報にて報告する。




西之丸発掘調査区の位置

発掘調査風景

六番御蔵の南東隅（南東から）

## （5）天守台穴蔵石垣試掘調査

調査期間　令和３年 11 月 25 日（木）～令和４年１月 18 日（火）

調査地区　本丸地区

調査面積　32㎡

調査目的　大天守、小天守における地下遺構残存状況確認のための調査

調査担当　二橋慶太郎、木村有作、大西健吾、西本茉由

調査概要

大天守、小天守における地下遺構の残存状況を確認するため、令和３年度は大天守に①～④調査区、小天守に⑤、⑦、⑧調査区（⑥調査区は厚いコンクリート基礎が直下にあり調査であったため調査は未実施。）を設定し調査を行った。なお、橋台の⑨調査区については令和４年度に調査予定である。

調査の結果、すべての調査区で近世整地土層を確認し、天守閣再建時から近世に至る土層の堆積状況を確認することができた。

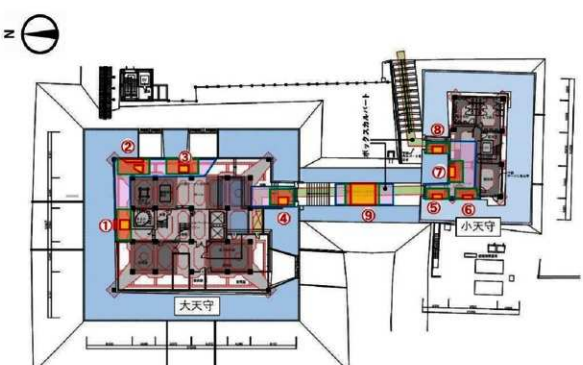
主要な遺構としては、大天守①調査区で石垣前面で近世面を切って据えられた大型石材３石からなる石列を検出した。今回の調査では部分的な検出にとどまるため、その性格をより正確に把握するため、令和４年度に追加調査を予定している。

大天守④調査区では凝灰岩製の石樋を検出した。『金城温古録』には、大天守内の井戸から汲み取った水を口御門の石樋へ流したのと記述があり、今回検出した石樋もこれに該当すると考えられる。加えて石樋の両側には近世に敷かれたとみられるたたきが面的に確認された。

小天守⑤、⑦～⑧調査区では、近世盛土を掘りこんだ小形石材の集中が確認された。小天守閣再建前の写真を確認すると、これらの付近には小天守礎石が存在した可能性があることから、礎石設置に際しての根固め地業の一部ではないかと考えている。

以上の通り、今回設定した調査区では近世盛土、遺構等が確認されたことから、現天守閣の再建工事においてその地下遺構のすべてが改変されたわけではないことが明らかになった。

出土遺物は、土間の一部とみられるたたき片や、和釘等の金属製品等が少数確認された。




調査位置図

①調査区 石垣前面の石列（南東から）

④調査区 石樋、両端のたたき面（東から）

## （6）二之丸地区試掘調査

調査期間　令和４年１月 11 日（火）～２月 10 日（木）
調査地区　二之丸
調査面積　40㎡
調査目的　特別史跡名古屋城跡未告示地区（二之丸）の保存活用方法を検討するための調査
調査担当　高橋圭也、大村陸、佐藤公保
調査概要

二之丸地区とは二之丸にある特別史跡未告示地区のことである。未告示状態を解消するために平成 30 年度から試掘調査を行っている。

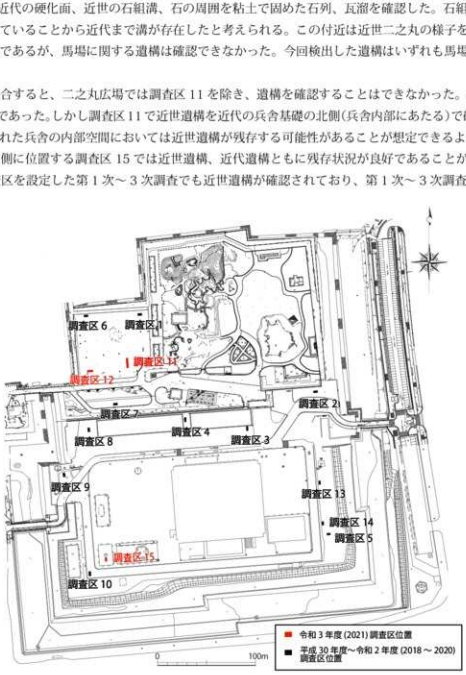
調査区 11 で近代の兵舎基礎、近世盛土、礫群等を確認した。礫群は二之丸御殿に関わる遺構である可能性がある。礫群は幅 120㎝のトレンチ内での検出であるため、遺構を面的に確認することはできなかった。近世遺構はいずれも兵舎基礎内部で確認され、兵舎基礎の外側は現代のかく乱を受けていた。

調査区 12 は調査区全体がかく乱を受けており、近世及び近代遺構を面的に確認することはできなかった。かく乱から 14 世紀の石造物、矢穴のある築石、レンガ等、様々な年代の遺物が出土した。

調査区 15 では近代の硬化面、近世の石組溝、石の周囲を粘土で固めた石列、瓦溜を確認した。石組溝は溝埋土上層から近代遺物が出土していることから近代まで溝が存在したと考えられる。この付近は近世二之丸の様子を描いた「御城二之丸図」によると馬場であるが、馬場に関する遺構は確認できなかった。今回検出した遺構はいずれも馬場廃絶後の遺構と考えている。

調査の結果を総合すると、二之丸広場では調査区 11 を除き、遺構を確認することはできなかった。この状況は第１次～２次調査でも同様であった。しかし調査区 11 で近世遺構を近代の兵舎基礎の北側(兵舎内部にあたる)で確認できたことから、二之丸一帯に作られた兵舎の内部空間においては近世遺構が残存する可能性があることが想定できるようになった。

愛知県体育館西側に位置する調査区 15 では近世遺構、近代遺構ともに残存状況が良好であることがわかった。愛知県体育館の周辺で調査区を設定した第１次～３次調査でも近世遺構が確認されており、第１次～３次調査の成果を追認することができた。




調査位置図

調査区 11 兵舎基礎内側に残る近世遺構面（北から）

調査区 15 全景（北から）

## 2　石垣調査

### （1）石垣カルテの作成

現地調査期間　令和４年２月７日（月）～２月22日（火）

石垣カルテ作成面積　7,411㎡（全13面）

オルソ画像作成面積　0㎡

調査担当　大村陸、二橋慶太郎、大西健吾

調査概要

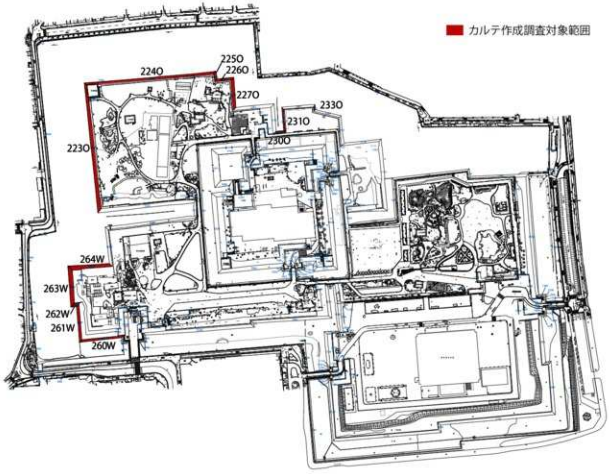
令和３年度は、昨年度に引き続き、石垣カルテの作成を行った。なお、石垣のオルソ画像は作成しなかった。

石垣カルテは、御深井丸外堀、西之丸外堀（水堀を含む）を対象とし、石垣に近接して肉眼で破損状況、刻印等の確認を行った。水堀部分については、ボートにより接近して観察を行った。

観察の結果、直ちに崩落の恐れがある石垣は見られなかったものの、石垣の孕み出しや築石の割れ、間詰石の抜けが各所で確認された。なかでも西之丸外堀の262W石垣では、隅角部が開き、中段部～裾部にかけての孕み出しといった大きな変状が確認された。水堀に面した石垣であるため利用上の危険度は低いが、崩落の危険性の高さを考慮し、今後も状況を注視していく。また、水堀では石垣沿いの水中に多くの石材が落下していることを確認した。

その他、御深井丸外堀の225O石垣では、中央部の中段から裾部にかけて算木積み状の目地が通ることを確認した。丁場割図にみられる行合丁場の痕跡である可能性がある。西之丸外堀の262W石垣では花崗斑岩の分布が顕著にみられ、丁場割図における浅野紀伊丁場との整合性が伺える。また、御深井丸外堀の223O・224O石垣、西之丸外堀の263W・264W石垣の隅角石に火山砕屑岩（竜山石）が用いられていることを確認した。竜山石は風化による剥離等の劣化がみられたが、石垣石材としての評価も考慮していく必要がある。

今後も石垣カルテの作成を進めるとともに日常的な石垣の観察を行っていく。




令和３年度石垣カルテ調査対象石垣位置図

調査写真

現地調査の様子（２３００石垣）

現地調査の様子（２２４０石垣）

## （2）石垣および地中レーダー探査

調査期間　令和３年 10 月４日（月）～ 12 月 10 日（金）

調査地区　本丸、御深井丸地区

調査面積　―

調査目的　御深井丸側内堀石垣、外堀側石垣の背面構造、築石の控え長等確認のための調査

調査担当　二橋慶太郎、木村有作、西本茉由、大西健吾

調査概要

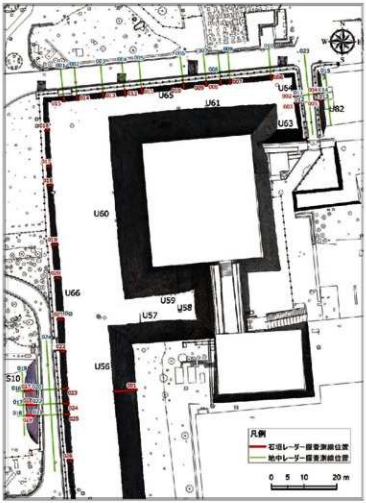
顕著な変形や劣化が見られる御深井丸側内堀石垣等について、石垣の背面構造や築石石材の控え長等を把握するため、地中および石垣のレーダー探査を行った。調査位置については、「調査位置図」の通りである。

調査は株式会社竹中工務店が実施し、調査中は名古屋城調査研究センター学芸員が立会った。使用装置は GSSI 社製の SIR-3000 でアンテナ周波数は地中レーダー探査では 400MHz、石垣レーダー探査では 400MHz、900MHz である。

調査結果について、石垣面の劣化が著しい U65 石垣 ( 御深井丸側内堀石垣 ) の例を基に述べる。背面構造については、図３のとおりとなっている。石垣の背面において空隙を示す白色の反応はほとんど見られず、栗石が締固められている状況を確認した。また、栗石層は石垣の積み直しが想定される個所で厚みに変化が見られた。

築石の控え長については「U65 における石垣築石控え長調査結果」の通りである。全体の傾向として、石垣下部では控え長の長い石材が多く、上部では控え長の短い石材が目立った。また、U65 石垣などの近代以降の積み直しが見られる部分では、控え長が若干短い傾向が確認された。

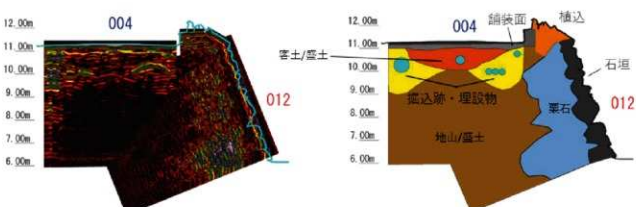
U65 以外の石垣でも類似した結果が確認されたことから、今回の調査地点においては、石垣の背面には安定性を損なうような空隙はみられず、築石石材の控え長は近代以降の積み直しが想定される部分ではやや短いが、一定の長さを有することを確認した。




調査位置図

調査写真

地中レーダー探査の様子




U65 における地盤、石垣レーダー探査結果

U65 における石垣築石控え長調査結果

## （3）城内石材確認調査

調査期間　令和３年８月 19 日（木）～令和４年３月 31 日（木）

調査面積　約 3000㎡

調査担当　酒井将史、木村有作、花木ゆき乃、二橋慶一郎、高橋圭也、瀬崎健、大村陸、佐藤公保、大西健吾

調査概要

本調査は、城内各所で保管されている石材の現状を把握し、今後の保存整備・活用において使用を検討するための基礎情報を得ることを目的に実施した。

調査対象としたのは、本丸・搦手馬出・二之丸・御深井丸・二之丸外堀の石材保管箇所で、約 3000㎡に分布する計約 2400 石の石材を調査した。調査では石材の分布状況の図面とオルソ画像を作成し、番号付けした石材の岩種及び３辺の長さなどを記録した。

二之丸外堀の堀底に最も多く石材があり、市内各所から寄贈を受けた景石や間詰石、元々城内に保管されていた築石などが確認された。岩種は砂岩･花崗岩･花崗閃緑岩が中心にみられた。次いで分布しているのが御深井丸南西の資材置き場であった。城内の整備に伴う石材が主に保管されており、大半が築石である。岩種は花崗岩と花崗閃緑岩が主体であった。

調査の中で、築石の石材に刻印や矢穴があるものも記録しており、刻印は 87 石、矢穴は 261 石で確認した。

調査写真

御深井丸所在石材

二之丸外堀所在石材

## （4）本丸石垣現況調査

調査期間　令和３年６月１日（火）～令和４年３月31日（木）

調査地区　本丸地区

調査面数　42 面

調査目的　本丸周辺における石垣の劣化状況確認のための調査

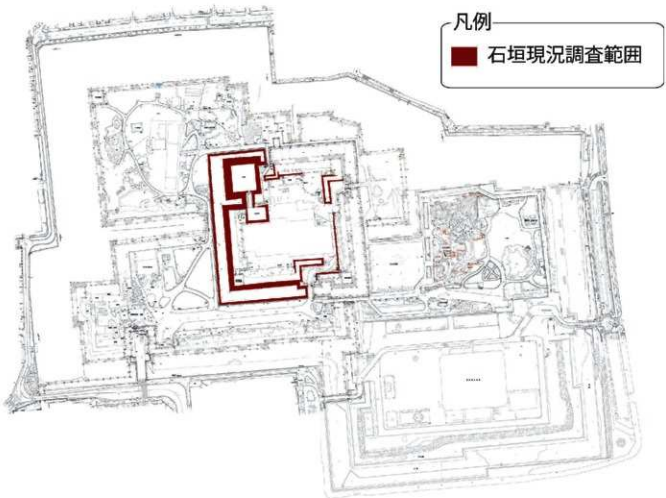
調査担当　村木誠、木村有作、酒井将史、西本茉由、花木ゆき乃、二橋慶太郎、瀬﨑健、高橋圭也、大村陸、大西健吾、佐藤公保

調査概要

名古屋城跡内における石垣管理の一環として、城内石垣の現況確認調査を行った。初回である本年度は本丸内の石垣を調査した。

調査は名古屋城調査研究センターの考古担当学芸員が分担し、担当の石垣を月１回の頻度で通年観察し、変状の見られる箇所を石垣オルソ図に記入した。写真撮影もあわせて行った。調査に当たっては石垣石材の落下等、石垣に大きなき損の有無の確認に主眼に置きつつ、築石等の割れや間詰の抜け等も記録した。

通年による調査の結果、今回の調査対象石垣では大きな変状は確認されなかったものの、一部の石垣では間詰石の落下が確認された。今後も継続して調査を実施し、石垣の保全に努める。




調査位置図

### （5）名古屋城内石垣安定性調査

調査期間　令和４年３月９日（水）～３月 17 日（木）

調査面積　4,442㎡（全１９面）

調査担当　村木誠、西本茉由

調査概要

本調査の目的は、名古屋城内の石垣においてこれまでに行った石垣カルテ作成等の現況調査によって変形や劣化が確認された石垣について、石垣保存の観点から対応方法を検討するものである。

内容としては、孕み箇所、熱傷箇所、表面劣化・亀裂などの損傷個所を調べ、石材の配列、大きさ、加工度合いなどの石垣の特徴を把握したうえで、破損状態となる原因を推測した。また破損個所のうち代表的な損傷を例として、修理方法の検討を行い、石垣面ごとに修理（復旧）方針等を整理した。

調査の結果として、各石垣面での破損、劣化状況と、対応方針の案を整理した。調査の対象とした石垣は城内石垣の中でも顕著なはらみ出し、被熱による石材劣化、隅角石の割れ、間詰石の抜け落ち等が確認された個所であったが、劣化石材に対する補修や詰石による部分補強等を行うことにより、石垣保存の効果が得られる可能性があることが確認できた。

## 3　工事立会

### （1）二之丸庭園修復整備工事に伴う立会

工事期間　令和４年１月 12 日（水）～２月４日（金）

工事地区　二之丸（北）地区　二之丸庭園北御庭

事業面積　―

工事原因　名勝名古屋城二之丸庭園修復整備工事（北園池手水石の据え直し）

立会担当　大村陸、花木ゆき乃

立会結果

二之丸庭園では平成 24 年度（2012 ～ 2013）から毎年修復整備工事を実施している。令和３年度（2021 ～ 2022）は北園池にて手水石の据え直しを行った。

四又の支保工で石を支え、石組に入り込んでいる腐食した根を除去した。生じた空隙は石や混合土で充填した。東側面は土嚢を取り外し、樹木根を除去し、石を補填した。

今回の修復整備工事では、新補石材を用いず、二之丸庭園北御庭（遂涼閣跡）で保管していた過去の工事や発掘調査で出土した石材を景石や間詰石として使用した。

立会写真

石の据え直し

保管石材の移動

## （2）正門便所改修工事の立会

工事期間　令和３年 11 月８日（月）～令和４年３月 23 日（水）

工事地区　西之丸 正門

事業面積　―

工事原因　正門便所の改修

立会担当　高橋圭也、二橋慶太郎、花木ゆき乃、佐藤公保

立会結果

本立会は正門便所改修工事に際し、立会を実施したものである。

正門便所改修にあたり、新規の配管を設置するために 31㎡を掘削した。掘削は正門便所設置時に掘削された範囲内で行われた。遺物は瓦片を採取した。

立会写真

掘削風景

## 4　資料調査（文書典籍・美術工芸）

令和３年度は、令和元年度の名古屋城研究センター発足以来３年間にわたって調査してきた名古屋城築城期に関する文献調査の成果を様々な形で公表・紹介した。

年度当初は、名古屋城築城期の石垣普請に関するシンポジウムを開催するため、熊本大学永青文庫研究センター及び東京大学史料編纂所の及川亘氏との事前打ち合わせを進めた。また、及川氏が紹介した靖國神社遊就館所蔵「名古屋御城石垣絵図」の調査を実施し、資料の形状や状態から、丁場割図の原本である可能性が高いことを確認した。

11月には、シンポジウムの関連事業として、西の丸御蔵城宝館の開館記念特別展「名古屋城誕生！」を開催した。展覧会では「松井家文書」の新発見史料を含む名古屋城築城関係文書、靖國神社遊就館所蔵「名古屋御城石垣絵図」等を出品するとともに、翻刻文を付したリーフレットを作成し、名古屋城築城期に関する最重要資料を紹介した。

12月には、名古屋城調査研究センター及び熊本大学永青文庫研究センターの共催で、シンポジウム「名古屋城調査研究報告 史料が語る 名古屋城石垣普請の現場」の動画収録を実施し、翌年２月にウェブ公開を開始した。

また、講演内容を基にした論考及びディスカッション記録を掲載したシンポジウム報告書を刊行し、令和元年度より進めてきた共同研究の成果を公表した。さらに、報告書には史料編として靖國神社遊就館所蔵「名古屋御城石垣絵図」の画像を分割掲載し、一般的に公開されず閲覧が難しかった丁場割図の内容を容易に確認できるようにした。

そのほか、昨年度に引き続き、名古屋城の整備事業に関連した史料調査、新規開館した西の丸御蔵城宝館の特別展及び企画展に向けた史料調査を実施した。

史料調査一覧

| 年月日 | 場所 | 調査者 | 目的 |
|---|---|---|---|
| 令和３年（2021）<br>７月１日（木） | 名古屋市蓬左文庫 | 木村慎平 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の調査 |
| 令和３年<br>７月２日（金） | 名古屋市博物館 | 木村慎平 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の調査 |
| 令和３年<br>７月14日（水） | 博物館明治村 | 木村慎平 | 第六連隊兵舎図面（近代名古屋城二之丸建造物）に関する調査 |
| 令和３年<br>７月20日（火）<br>～７月21日（水） | 熊本大学永青文庫研究センター<br>熊本県立図書館 | 木村慎平<br>堀内亮介 | シンポジウム打ち合わせ<br>名古屋城築城関係資料の調査 |
| 令和３年<br>７月28日（水）<br>～７月29日（木） | 東京大学史料編纂所<br>靖國神社遊就館 | 木村慎平<br>堀内亮介 | シンポジウム打ち合わせ<br>「名古屋御城石垣絵図」の調査 |
| 令和３年<br>９月15日（水） | 名古屋市博物館<br>名古屋市蓬左文庫 | 木村慎平<br>種田祐司 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の調査及び借用 |
| 令和３年<br>10月11日（月） | 熊本大学附属図書館 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の調査及び借用 |
| 令和３年<br>10月15日（金） | 靖國神社遊就館 | 木村慎平 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の調査及び借用 |
| 令和３年<br>11月12日（金） | 京都国立博物館 | 朝日美砂子 | 旧名古屋城瓦鯱の調査 |
| 令和３年<br>11月14日（日） | 山梨県立考古博物館 | 朝日美砂子 | 名古屋城瓦鯱関連資料の調査 |
| 令和３年<br>11月15日（月） | 東京国立博物館 | 朝日美砂子 | 旧江戸城銅鯱（現名古屋城所在）関連資料の調査 |
| 令和３年<br>11月15日（月） | 名古屋市蓬左文庫 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 撮影予定資料の調査<br>企画展「殿の御庭」出品資料の調査 |
| 令和３年<br>11月24日（水） | 愛知県公文書館 | 木村慎平 | 五條橋修理関係史料の調査 |
| 令和３年<br>11月24日（水） | 名古屋市鶴舞中央図書館 | 木村慎平 | 公儀普請関係史料の調査 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 令和３年<br>11 月 24 日（水） | 宮内庁宮内公文書館 | 朝日美砂子 | 旧江戸城鉄鉄（現名古屋城所在）関連資料の調査 |
| 令和３年<br>11 月 29 日（月） | 浄慶寺 | 原史彦<br>朝日美砂子 | 杉戸絵調査 |
| 令和３年<br>12 月９日（木） | 名古屋銀行協会ビル | 原史彦<br>木村慎平<br>堀内亮介<br>種田祐司 | シンポジウム動画収録 |
| 令和３年<br>12 月 10 日（金） | 揚輝荘 | 朝日美砂子 | 壁クロス調査 |
| 令和３年<br>12 月 21 日（火） | 名古屋大学 | 木村慎平 | 近代二之丸関係の史料調査 |
| 令和３年<br>12 月 23 日（木） | 靖國神社遊就館 | 木村慎平 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の返却 |
| 令和３年<br>12 月 28 日（火） | 熊本大学附属図書館 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の返却 |
| 令和４年（2022）<br>1 月７日（金） | 博物館明治村 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 第六連隊兵舎図面（近代名古屋城二之丸建造物）に関する調査・撮影 |
| 令和４年<br>1 月 14 日（金） | 博物館明治村 | 堀内亮介 | 第六連隊兵舎図面（近代名古屋城二之丸建造物）に関する撮影 |
| 令和４年<br>1 月 18 日（火） | 名古屋市蓬左文庫 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 企画展「風薫る 殿の御庭」出品資料の調査 |
| 令和４年<br>1 月 20 日（木） | 名古屋市博物館<br>名古屋市蓬左文庫 | 木村慎平<br>堀内亮介 | 特別展「名古屋城誕生！」出品資料の返却 |
| 令和４年<br>3 月１日（火） | 宮内庁東御苑・防衛省防衛研究所 | 朝日美砂子 | 旧江戸城鉄鉄（現名古屋城所在）関連資料の調査 |
| 令和４年<br>3 月 16 日（水） | 博物館明治村 | 木村慎平 | 第六連隊兵舎図面（近代名古屋城二之丸建造物）に関する撮影・返却 |
| 令和４年<br>3 月 17 日（木） | 愛知県陶磁美術館 | 堀内亮介 | 企画展「風薫る 殿の御庭」出品資料の調査 |

複写収集資料一覧

| 資料名 | 資料番号 | 点数 |
|---|---|---|
| 名古屋市蓬左文庫所蔵資料 | | |
| 蓬左遷府記稿 | 147-111 | 1 冊 |
| 編年大略 | 129-47 | 1 冊 |
| 張州府志 | 127-4 | 26 冊 |
| 尾張志 | 137-1 | 60 冊 |
| 御天守御修覆留 | 30-17 | 1 冊 |
| 明治四年雑記録 | 27-65 | 1 冊 |
| 御書籍払帳 | 148-14 | 1 冊 |
| 御書籍目録（慶安４年） | 148-24 | 1 冊 |
| 源敬様御代分限帳 | 30-56 | 1 冊 |

## 5　デジタル化事業

### （1）名古屋城史跡等管理システム

概要

令和３年度は、発掘調査の調査区設定等に活用するため、特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置情報を下記の通り集成し、システムに登録した。

今後も、名古屋城内で実施された現状変更、発掘調査等について、情報の更新を進めていく。

登録情報

2020 ～ 2021 年度 特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置　全 108 件

### （2）名古屋城関係資料データベース

概要

名古屋城調査研究センターでは、令和元年度より名古屋城に関係する資料の高精細デジタル画像を検索・閲覧できる「名古屋城関係資料データベース」を導入した。現在は所内での調査研究事業に活用している。また、データベースの拡充を図るため、毎年継続的に名古屋城関連史料の高精細デジタル画像を作成し、データベースへの追加登録を行っている。

令和３年度は、名古屋市蓬左文庫所蔵「金城温古録」の高精細デジタル画像をデータベースに登録し、画面上で原資料の閲覧ができるようにした。

データベース登録画像一覧

| 種類 | 提供 | 画像点数 |
|---|---|---|
| 古絵図 | 愛知県図書館 | 2 点 |
| | 徳川美術館 | 15 点 |
| | 徳川林政史研究所 | 10 点 |
| | 名古屋市博物館 | 12 点 |
| | 名古屋市蓬左文庫 | 1,702 点 |
| | 個人蔵 | 19 点 |
| 昭和実測図 | 名古屋城総合事務所 | 310 点 |
| その他図面 | 名古屋城総合事務所 | 86 点 |
| 野帳 | 名古屋城総合事務所 | 277 点 |
| 拓本 | 名古屋城総合事務所 | 561 点 |
| ガラス乾板写真 | 名古屋城総合事務所 | 737 点 |
| 重要文化財旧本丸御殿障壁画 | 名古屋城総合事務所 | 1,080 点 |
| 古典籍 | **名古屋市蓬左文庫** | **2,930 点** |
| 合計 | | 7,741 点 |

※ 太字は令和３年度追加画像。

※ 令和３年度より資料の種類に「古典籍」を追加した。

※ 複数の画像を登録した資料があるため、画像点数は資料の点数とは異なる。

# Ⅱ　資料管理

## 1　所蔵資料・受託資料の概要

### （1）所蔵資料

①重要文化財　旧本丸御殿障壁画（331 点、附 16 点）、天井板絵（331 点、附 369 点）

計 1,047 点

慶長 20 年（1615）造営、寛永 11 年（1634）増築の本丸御殿内に描かれた障壁画群。本丸御殿は昭和 20 年（1945）の空襲により焼失したが、事前の疎開により襖絵、障子腰貼付絵、杉戸絵、天井板絵は焼失を免れた。なお、壁貼付絵は取り外しが困難なことから事前の疎開ができず、本丸御殿と共に焼失した。

障壁画は慶長造営期・寛永増築期を通じて、狩野派の絵師によって描かれた。慶長造営期は当時の狩野家当主であった狩野貞信をはじめ、狩野甚之丞などが担当、寛永増築期は江戸幕府の御用絵師である狩野探幽をはじめ、狩野杢之助などが担当した。

城郭御殿の障壁画が一括して保存されている事例は、京都市・二条城と名古屋城の 2 例のみであり、全国的に見ても極めて貴重な資料群である。

文化財指定の経緯

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和 17 年 | 1942 | 6 月 26 日 | 障壁画 345 面（附 16 面）が国宝保存法に基づく国宝（旧国宝）に指定 |
| 昭和 25 年 | 1950 | 8 月 29 日 | 文化財保護法施行に伴い、旧国宝のうち障壁画 199 面（附 16 面）が重要文化財に指定（旧国宝指定分のうち障壁画 146 面は戦災により焼失） |
| 昭和 30 年 | 1955 | 6 月 22 日 | 障壁画 132 面が重要文化財に追加指定 |
| 昭和 31 年 | 1956 | 6 月 28 日 | 天井板絵 331 面（附 369 面）が重要文化財に追加指定 |

②ガラス乾板写真　738 枚

昭和 15 ～ 16 年(1940 ～ 41)に、旧国宝に指定されていた建造物 24 棟および本丸御殿障壁画を中心に撮影された写真。一部、戦後に撮影された写真や他のガラス乾板写真を転写した写真などを含む。

③昭和実測図　307 枚

昭和 7 年（1932）に旧国宝に指定されていた建造物 24 棟の詳細な実測図。昭和 7 年実測調査開始、昭和 17 年完了、第二次世界大戦による中断を経て、昭和 27 年に清書完了。屋根瓦や飾金具の拓本も含まれる。

④その他の主要な所蔵資料

1．享元絵巻…尾張藩七代藩主・徳川宗春の治世下、享保 17 ～ 21 年（1732 ～ 36）ごろの名古屋城下本町通沿いの様子を描いた画巻。遊郭や芝居小屋の賑わいなど、当時の風俗を鮮やかに描く。

2．金城温古録…奥村得義・定によって編纂された名古屋城の詳細な記録集。明治 26 年（1893）に名古屋城の本丸・西之丸などが陸軍省から宮内省に移管され、名古屋離宮となるが、名古屋城本はその際に第三師団司令部所蔵本（現・靖國神社遊就館本）を転写し作成された。全 64 巻のうち、得義が尾張藩に献納した 31 巻分のみの写本となっている。

3．木子コレクション…故木子進發氏が収集した計 600 点以上に及ぶ刀剣・刀装具のコレクション。

4．戦災資料…焼損した天守・本丸御殿の金具、金鯱の鱗片、焼夷弾の弾頭など。

5．収集資料…武具、甲冑、名古屋城の図面類など、近世武家文化・名古屋城に関わるものが中心。

### （2）受贈資料

・絵画工芸資料　　16 件 21 点

江戸時代前期の風俗図屏風、尾張狩野派による掛軸など。

(3) 受贈・購入図書

(単位：冊)

| | 報告書 | 図録 | 紀要 | 年報 | 資料集 | リーフレット | 一般書籍等 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受贈 | 284 | 92 | 41 | 38 | 8 | 17 | 53 | 533 |
| 購入 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 97 | 102 |
| 合計 | 288 | 93 | 41 | 38 | 8 | 17 | 150 | 635 |

## 2 資料の修理

### (1) 名古屋城旧本丸御殿障壁画保存修理事業（文化庁補助事業）

昭和61年（1986）よりの継続事業。障壁画331面については平成17年度（2005～06）に根本修理（解体修理）を完了した。平成27年度（2015～16）より根本修理完了画面について点検修理を実施しており、並行して天井板絵331面（附369面）の根本修理を実施している。今年度は下記の画面を修理した。

令和3年度修理画面

①点検修理

| 作品名 | 場所 | 形状 | | 面数 |
|---|---|---|---|---|
| 風俗図　39 | 対面所上段之間南側付書院 | 障子腰貼付絵 | 紙本着色 | 2面 |
| 風俗図　40 | 対面所上段之間南側 | 障子腰貼付絵 | 紙本着色 | 4面 |
| 扇面流図　93 | 湯殿書院一之間西側 | 襖絵 | 紙本金地着色 | 4面 |
| 松笹花鳥図　94 | 湯殿書院上段之間東側 | 襖絵 | 紙本金地着色 | 4面 |
| 合計 | | | | 14面 |

②根本修理

| 作品名 | 場所 | 形状 | | 面数 |
|---|---|---|---|---|
| 山水図　193(129) | 上洛殿一之間 | 天井板絵R変形 | 紙本墨画 | 1面 |
| 山水図　194(130) | 上洛殿一之間 | 天井板絵R変形 | 紙本墨画 | 1面 |
| 猫図　195(131) | 上洛殿一之間 | 天井板絵R変形 | 紙本淡彩 | 1面 |
| 桐文図<br>附210(577)・附211(578)・附226(579)・<br>附227(580)・附228(581)・附229(582)・<br>附243(596)・附269(601)・附270(602) | 上洛殿入側 | 天井板絵 | 紙本着色 | 9面 |
| 七宝唐草文図<br>附276(607)・附278(609)・附279(610)・<br>附280(611)・附281(612)・附282(613)・<br>附283(614)・附284(615)・附285(616)・<br>附286(617)・附287(618)・附288(619)・<br>附289(620)・附290(621)・附291(622)・<br>附292(623) | 上洛殿三之間 | 天井板絵 | 紙本着色 | 16面 |
| 合計 | | | | 28面 |

（2）余芳亭障壁画

令和３年度の展示にそなえ、下記資料の点検を行った。

「春景草花図障子腰板絵」　板画着色金砂子散　　６面

（3）昭和金鯱

栄ヒロバス等での金鯱展示に向け、金鱗、ビスなどの修理を行った。

## 3　資料の移動

名古屋城本丸内で保管していた本丸御殿障壁画を西の丸の収蔵スペースへと移動した。

## 4　資料の利用

（1）資料貸出

| 貸出期間 | 貸出先 | 貸出目的 | 貸出資料 |
|---|---|---|---|
| 令和３年（2021）４月 24 日（土）～８月 29 日（日） | ヤマザキマザック美術館 | 「名古屋城からはじまる植物物語」展 | 藤花図（重要文化財　名古屋城本丸御殿上洛殿一之間天井板絵）はじめ 12 点 |

（2）写真貸出

62 件 867 点（観光用写真を除く）

（3）熟覧

| 熟覧日 | 熟覧者 | 熟覧目的 | 熟覧資料 |
|---|---|---|---|
| 令和３年度（2021）４回 | 名古屋城本丸御殿復元模写共同体 | 名古屋城本丸御殿模写作成の参考のため | 重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵 |
| 令和３年 11 月 25 日（木） | 個人 | 芍薬図の研究 | 重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画 |
| 令和４年（2022）２月 19 日（土） | 金工史研究会 | 銅鯱の研究 | 旧江戸城銅鯱他 |

# Ⅲ　展示事業

## 1　西の丸御蔵城宝館

### （1）プレオープン特別企画「鯱展」

会期：令和３年４月16日（金）～５月９日（日）　24日間

入館者数：11,577人

出品件数：33件

展示趣旨：西の丸御蔵城宝館の本格開館に先立ち、プレオープン特別企画として名古屋城に伝わる鯱を一堂に展示した。

※出品作品解説等は『名古屋城調査研究センター研究紀要』第３号に所収のため、本年報では省略する。

### （2）開館記念特別展「名古屋城誕生！」

会期：令和３年11月１日（月）～12月19日（日）　49日間

入館者数：44,875人

出品件数：30件

展示趣旨：西の丸御蔵城宝館の開館を記念し、新発見の史料を含む名古屋城普請に関する史料を展示し、石垣普請の実態を紹介した。また、重要文化財本丸御殿障壁画「松楓禽鳥図」（表書院）を展示し、本丸御殿の壮麗な障壁画を紹介した。

※出品作品解説等は『名古屋城調査研究センター研究紀要』第３号に所収のため、本年報では省略する。

### （3）企画展「武家の備え」

会期：令和４年１月１日（土・祝）～４月10日（日）　100日間

入館者数：51,021人（～３月31日）

出品件数：60件

展示趣旨：江戸時代の武士は、常に戦の準備を怠りなく務め、さまざまな戦道具を準備していた。本展では、名古屋城コレクションの中から、戦道具の優品を選び、備えの機能と意匠の美を紹介した。

作品解説

**第一章　弓馬の道**

槍・弓は人類が初めて手にした武器の一つで、当初は狩猟用だったが、やがて戦闘にも用いられるようになり、さまざまな改良が加えられていった。日本では弾力のある竹を幾層にも重ねて張力を増す長弓が生み出された。

馬を操る技術は、ユーラシア大陸の遊牧民から発達したと考えられ、機動性が高いため、紀元前には世界各地で騎馬戦が導入された。日本には４世紀末頃に中国大陸より騎馬の風習が伝わったと考えられている。

戦闘を生業とする武士の登場により、武器の改良が促進され、同時に武器を扱う技術の向上をもたらした。特に弓や馬に精通していることは武士の誉れとされ、弓馬の鍛錬は武家社会における必須の教養・技術となった。

1　黒漆塗重籐弓　くろうるしぬりしげとうのゆみ

江戸時代　19世紀　村上源一作

竹材と弾力のある櫨（はぜ）などの木材を合わせて接着し、ヤシ科の植物である籐（とう）を巻き付けて接着を補強した合弓（あわせゆみ）である。日本の弓は長さ２メートルを超える世界最大の弓で、握り部は中心より下となる。張力を増すため曲線造りとなり、反対側に反り返して弦（つる）を張った。弦は、縒（よ）った麻糸に松脂（まつやに）と油を煮込んで煉（ね）り合せたクスネや、漆を塗って強度を高めた。作者の村上源一は、丹波国亀山（現・京都府亀岡市）の弓職人で名匠として知られる。

2　鏃　やじり

江戸時代　19世紀

矢の先に付ける鏃は矢の貫通力や威力を増すため、様々な形が考案された。先を三角状とする鏃が主流だが、細身や丸身

を帯びた形状もある。三角形で幅広の「平根（ひらね）」や、先が二股に分かれた「雁股（かりまた）」は対象を射切る時に威力を発揮する。鏃の元の部分を鋭利にした形状は、抜くときも損傷を与えるため「鵲縋（わたくり）」と呼ばれる。中央に透かしを入れた装飾的な鏃も作られた。

3　黒革漆塗丸十字紋付箙　くろかわうるしぬりまるにじゅうじもんつきえびら

江戸時代　19 世紀

矢を収納し携帯する道具である。矢先を収納する箱型の「方立（ほうだて）」に、矢を支える背板、もしくは枠を付けて矢を紐でくくる形状を正式とするが、本作のように矢を束ねる枠を支木で繋ぐ略式の形状もある。紐で腰や背に結んで携帯し、柄の縋り込みを帯等に挟んで落下防止とした。鷹羽の矢 10 本が附属する。

4　黒漆塗葵紋蒔絵靫　くろうるしぬりあおいもんまきえうつぼ

江戸時代　17 ～ 18 世紀

矢を収納し携帯する道具である。「うつぼ」とも「ゆぎ」とも読まれる。上部を「穂（ほ）」、下部を「竈（かまど）」と称する。当初は細長い箱型の形状だったが、11 世紀頃には矢の形状に合わせた壺形となった。矢全体を収納するため、雨に濡れない構造となっており、下部の蓋より矢を出し入れした。「竈」内の底は鏃が刺さりやすいように簀子（すのこ）状になっている。矢は 10 本程度が収納でき、腰に付けて携行する。上下にあしらわれた葵紋は、葵葉の葉脈が細く古様を示している。

5　金箔貼土俵空穂　きんぱくぱりどひょううつぼ

江戸時代　18 ～ 19 世紀

矢を収納して携行する道具の一つだが、通常の靫（空穂）より大量の矢を収納し、射手本人ではなく、従者が携行する。多くの矢羽根を収納するため、上部の「穂」部分が大きく、膨らみをもつ。その形状が土俵に似るため、土俵空穂と称された。竹を編み漆で固めて軽量化し、金箔を貼って豪華さを演出する。下部の「竈」部分の蓋には鋲打ち出しによる桐紋が象られている。

6　白革葵紋付鞦　しろかわあおいもんつきゆがけ

江戸時代　19 世紀　尾張徳川 16 代義宜所用　三輪神社・平尾建氏寄贈

弓を引く際に指を保護する鹿革の手袋である。右手にはめ矢をつがえる親指・人差し指・中指のみを覆う「三ツガケ」の形式で、親指には指状に刳（く）り貫いた木が仕込まれている。カケ紐で手首を巻き締めることにより、手首の負担を和らげると同時にブレを軽減させた。左手の親指を保護する「押し手がけ」と称する鞦も附属する。尾張徳川家の矢場が境内に設けられ、義宜（よしのり）を祭神とする三輪神社（名古屋市中区）に伝来した。

7　七曜紋付獅子牡丹文蒔絵鞍　しちようもんつきししぼたんもんまきえくら

江戸時代　寛文 6 年（1666）家守作　大垣藩家老戸田権之助所用

美濃国大垣藩（現・岐阜県大垣市）で 1000 石の知行を持ち、家老職を勤めた戸田権太夫（とだごんだゆう）家 7 代権之助（1822 ～ 91）所用の鞍である。権之助は天保 13 年（1842）に家督を継ぎ、維新後は第百二十九銀行（現・大垣共立銀行）の発起人取締役の一人となった。鞍上の敷物「鞍褥（くらじき）」、馬の背や横腹を保護する「肌付（はだつけ）」及び「切付（きっつけ）」、鞍と「鐙」を繋ぐ「力革（ちからかわ）」や「鞍置（くらおき）」が附属する。鞍の居木裏（いぎうら）に作者・家守（いえもり）の名と製作年を刻み、鞍置に所有者・権之助の名と安政 4 年（1857）の年号が墨書されている。

8　菊に流水・幾何文象嵌鐙　きくにりゅうすい・きかもんぞうがんあぶみ

江戸時代　19 世紀　下村久左衛門重久作

馬上で足を置く鉄製の鐙で、外側に菊や流水・幾何学文様を銀象嵌で表し、内側は青貝を張る。日本で 10 世紀頃前後に現れる舌長鐙（したながあぶみ）という形式である。足裏全体で体重を支えるため馬上での動きが安定することから、日本の鐙の主流形態となる。底に「尾州知多住重久」の銘があり、知多半島の大野（現・愛知県常滑市）を中心に活動した知多鍛冶の一人・下村久左衛門重久（しもむらきゅうざえもんしげひさ）の作とみなせる。

9　赤銅轡　しゃくどうくつわ

江戸時代　19 世紀

馬を制御する道具である。中央の「銜（はみ）」と呼ばれる部分を馬の口中の歯が無い部分にかませ、「鏡板（かがみいた）」と呼ばれる丸に十字形金具の先に付く「立ち聞き」と呼ばれる金具と、「面繋（おもがい）」と呼ばれる馬の頭に巻く紐を繋いで轡を安定させる。「鏡板」の左右に繋がる「引手（ひきで）」と呼ばれる棒状金具と手綱（たづな）を繋いで、馬上の主が馬を制御した。日本では古墳時代からこの形式の轡が存在する。

10　槍拵　やりごしらえ　4 本

江戸時代　19 世紀

弓と同様に狩猟具から転化した武器の一つである。相手と離れて戦える有効性を持つが、個人での接近戦や狭い場所では不利のため、戦国時代の戦では集団戦術によって弱点を補った。扱う人間の二倍以内の長さが有効とされるが、身長の数倍に及ぶ長槍も存在する。「突く」だけではなく、打ち下ろして打撃を与える戦法も行われた。

11 鼓形穂先槍拵　つづみがたほさきやりごしらえ

江戸時代　19 世紀

槍の先は革などを張った木製の鞘で保護した。一般的には槍の形状に合わせた鞘を用いるが、持ち主の標識とするため、独特の形状にする場合もあった。本作は小鼓を模した飾り鞘を用いる。江戸時代の参勤交代行列では、各大名家独自の飾り鞘が家を識別する印でもあった。高知の尾長鶏は、高知藩山内家の飾り鞘に用いるために品種改良して産み出された鶏である。

## 第二章　戦陣の装い

武家政権が成立した 12 世紀末以降、武家の慣わしが社会の規範を形作るようになった。領地支配の保証を与えてくれた政権に対して奉公を行うことが武家の務めであり、武家社会での地位の向上は、その務めの度合いに左右された。

戦場での活躍は、地位向上を得られる最大の機会である。武士は武功を挙げることに躍起になったが、武功は必ず第三者による証明を必要としたため、手柄を誇示する手段が求められた。

身を守る防具である甲冑はもとより、武器に至るまで、華麗かつ独特に彩るのは、他者との区別を明確にするためである。特に戦国時代には、奇抜な装いが流行した。名のある武士は、狙われやすくなること以上に、戦場で認識されることにこだわったのである。

12 沢瀉威二枚胴具足　おもだかおどしにまいどうぐそく

江戸時代　18 世紀　名古屋東照宮伝来

前胴と後胴を左脇の蝶番（ちょうつがい）で繋ぎ、別名「勝ち草」と呼ばれる沢瀉草の形を模して三角形の模様に色糸を威した当世具足である。当世具足とは「現代風」の意味で、源平合戦の頃から主流であった大鎧などに代わり、部品を大量生産可能に機能化し防御性と機動性を高めた鎧である。前胴には獅子、鉄錆地六十二間波筋兜（てつさびじろくじゅうにけんなみすじかぶと）の前立には長寿の象徴である尾長亀があしらわれている。平戸松浦家－徳川将軍家－尾張徳川家－名古屋東照宮に伝来した由緒を持つが確証はない。

13 銀覆輪黒漆塗丸に九曜紋・月齢輪文軍配

ぎんふくりんくろうるしぬりまるにくようもん・げつれいわもんぐんばい

江戸時代　17 ～ 18 世紀　新庄藩戸沢家伝来

戦場で軍勢を指揮する際に大将が用いる道具である。古くは神事において邪気を払い、霊験を呼ぶ道具だったが、戦の吉凶を占う意味で武具に取り入れられた。実用性は無く威儀を示す道具であり、本作の月齢のように天文や方位、仏を表す梵字（ぼんじ）、中国の易に基づく八卦（はっけ）などの図像が好んで用いられた。出羽国新庄（しんじょう）（現・山形県）で 6 万 8 千石を領した外様大名・戸沢家に伝来した大名道具で、表面には戸沢家の家紋がつけられる。

14 「勘」字陣太鼓　かんじじんだいこ

江戸時代　19 世紀　三輪卯左衛門所用

戦場における指揮具の一つである。大人数の軍勢を指揮する場合、人間の声では指示が行き届かないため、太鼓の叩き方

の違いを軍勢に周知させて、音のみで行動を指示した。銅鑼（どら）が使用される場合もある。尾張藩で幕末に支配勘定組頭（しはいかんじょうくみがしら）・勘定吟味役（かんじょうぎんみやく）を歴任した三輪卯左衛門（みわうざえもん）所用の陣太鼓で、「勘」の字は三輪の役職に基づき勘定所・勘定役を示すと考えられる。

15　黒漆塗桃実形兜　くろうるしぬりももの みなりかぶと

江戸時代　17 世紀

戦国時代以降に流行した変わり兜の一つで、円を描く長大な脇立が特徴である。戦国時代には鋲を打った星兜（ほしかぶと）や、筋を幾本も立てた筋兜（すじかぶと）に代わり、鉄板の打ち出しや、紙や革を固めて図像を象（かたど）る変わり兜が登場した。変わり兜は、戦場における識別を目的にするとともに、使用者の思想を反映している。本作は鉄板打ち出しで、中央に鎬（しのぎ）を立てて桃の実に似せた兜である。

16 鉄錆地越中頭形兜　てつさびじえっちゅうなりかぶと

江戸時代　17 世紀

鉄板打ち出しによる変わり兜の一つで、中央の上板、左右の脇板、正面の板と下部の腰巻板の五枚をはぎ合わせる形式を図形兜（ずなりかぶと）と呼ぶ。中でも上板が前板の上に重なり、前板の下端が一直線となる形式を越中形と呼ぶ。越中守を名乗った細川忠興（ほそかわただおき）（1563 ～ 1645）が好んだのが名の由来とされ、装飾性を省いた実戦重視の兜だが、本作は笄（しゃく）を象った後立（うしろだて）とし、鍔（しころ）を金陀美塗（きんだみぬり）として装飾性を持たせている。

17　黒漆塗烏帽子形兜　くろうるしぬりえぼしなりかぶと

江戸時代　17 世紀

張懸（はりかけ）と呼ばれる和紙を幾重にも漆で塗り固める技法で鉄鉢の上に烏帽子の形状を表した変わり兜である。「獅子噛（ししがみ）」と呼ばれる獅子の面を象った前立を付ける。「獅子噛」は魔除けの意味を持つ吉祥面で、神社建築や祭礼山車（だし）の装飾などにも用いられた。背面に後立を付ける金具があるが、後立は失われている。後頭部に猪の眼を象ったハート型の猪目（いのめ）穴を設けて、頭部への通気としていた。

18 網代貼笈形具足櫃　あじろばりおいがたぐそくびつ

江戸時代　18 ～ 19 世紀

僧や修験者が旅をする時に用いた笈を象った背負い式の具足櫃である。背負う人間に合わせて湾曲させ、四隅に脚をつけた笈の形状とするが、本来背の部分を開閉扉とするところ、扉を押さえる止め木を意匠として表現するだけで、具足の出し入れは上部の合口蓋（あいくちぶた）からとする。身の内部は上部に掛子（かけご）を置いて二重とすることで、兜と胴を分けて収納できる。背負い紐に所有者の家紋と思われる木瓜紋（もっこうもん）が表されている。

19 銀陀美蝶形兜　ぎんだみちょうなりかぶと

江戸時代　17 世紀

革による張懸で蝶を象った変わり兜である。頭部が尖った突盔形兜（とっぱいなりかぶと）の前面から側面にかけて羽を広げ、前面には蝶の触角を象る。鉢頂部に胴体、羽根には文様が描かれているが、形状から見れば蝶よりは蛾に近い。銀陀美とは銀紛を膠（にかわ）で溶いて塗る技法で、輝きを押さえた銀色を表現できる。本作は近代美術にも通じる斬新な意匠で、所有者の美意識が見事に表された優品である。

20 法螺貝　ほらがい

江戸時代　18 世紀　小田原藩士有浦元左衛門所用

軍勢の指揮に用いる道具の一つである。法螺貝の音を仏の声になぞらえ悪を調伏（ちょうぶく）するとして、もともとは修験道で用いられていた道具である。験（げん）をかつぐ戦場では戦の合図とする以外にも、戦意高揚を狙う役割も担った。殻の頂部を切断し、木製や金属製の吹口を付け、唇の振動で音を出す。貝口に「大久保加賀守様御使者有浦元左衛門」と記した墨書紙が張り付けられている。

陣羽織（21 ～ 23）　じんばおり

戦国時代末以降に流行した陣中衣装である。甲冑の上から着て防水・防寒の役割を果たしたが、意匠を凝らして武将の威儀を示す装飾品としても扱われた。保温性が高く火にも比較的強いことから、南蛮渡来の羅紗地で作られる場合が多い。

21 白羅紗地桐紋付陣羽織　しろらしゃじきりもんつきじんばおり

桃山時代　16 世紀　伝豊臣秀吉・溝口秀勝所用

背の桐紋を切り嵌（は）めの技法であしらうなど高級な作りだが、傷みがひどく縁裂（ふちぎれ）は失われている。越後国新発田（しばた）藩（現・新潟県）の溝口家 7 代直温（なおあつ）筆の箱書により、初代・秀勝（ひでかつ）（1548 ～ 1610）が、豊臣秀吉から拝領した陣羽織であることが判る。

22 紺羅紗地葵紋付陣羽織　こんらしゃじあおいもんつきじんばおり

江戸時代　19 世紀　尾張徳川家 16 代義宜所用　三輪神社・平尾建氏寄贈

尾張藩最後の藩主である 16 代義宜（よしのり）（1858 ～ 75）が所用した陣羽織で、背の中央に葵紋を付け、裏地は錦地で彩る。着用者の体格に合わせて、小ぶりに造られている。

23 紫羅紗地鶴丸紋付陣羽織　むらさきらしゃじつるまるもんつきじんばおり

江戸時代　19 世紀　尾張藩家老石河家伝来

尾張藩で 1 万石を知行し家老職を勤めた石河（いしこ）家に伝来した陣羽織で、背に大きく鶴丸紋をあしらい、肩に厚板（あついた）を入れ、襟（えり）は白摺箔地（しろすりはくじ）に紫地唐花唐草文（むらさきじからはなからくさもん）をあしらった裂で彩っている。

## 第三章　武士の魂

湾曲のある日本刀の形式が生み出されたのは 12 世紀末頃からである。鋼（はがね）の折り返し鍛錬や焼き入れによって強度を高め、美しく研（と）いで切れ味を増した日本刀は、武器であること以上に宝物・神物としても重視された。

日本各地に刀工集団が誕生したが、中でも備前国（現・岡山県）、山城国（現・京都府）、大和国（現・奈良県）、美濃国（現・岐阜県）、相模国（現・神奈川県）は「五箇伝」と称され、多くの名工を輩出している。優れた作品は「業物（わざもの）」や「名物」として珍重され、武家社会では最上の贈答品としても用いられた。

江戸時代は、武士のみが刀の二本差しを許された社会であった。刀は支配階級に属する証でもあり、武士は己の分身のごとく刀を大切に扱った。

24 太刀 銘 備州長船住法光造 / 永正十二年八月廿七日 / 所持 根津右衛門

たち めい びしゅうおさふねじゅうのりみつつくる / えいしょうじゅうにねんはちがつにじゅうしちにち / しょじ ねづえもん

室町時代　永正 12 年（1515）木子コレクション

備前国長船（現・岡山県）の刀工・法光による長銘の太刀である。長船は 13 世紀半ばの鎌倉時代中期以降に作刀が開始され、日本屈指の刀工集団を輩出した地で、法光を名乗る刀工は 14 世紀半ばの南北朝時代末期頃から数代の活躍が見られる。茎（なかご）の峰（みね）部分に本刀の所有者・根津右衛門の名が切られている。根津は、信濃国小泉（ちいさがた）郡（現・長野県東御市付近）を拠点とした国人衆の一人と考えられるが、来歴は明らかではない。

25 梨子地葵紋散蒔絵太刀拵　なしじあおいもんちらしまきえたちごしらえ

江戸時代　19 世紀　尾張徳川家 16 代義宜所用　三輪神社・平尾建裕氏寄贈

尾張徳川家 16 代義宜（よしのり）所用の作品番号 28「刀 銘 備州長船久光 / 文明四年二月日」に附属する太刀拵である。鞘（さや）を梨子地とし表裏に葵紋を 6 個ずつ金具（かながい）で配する。鍔（つば）・柄（つか）の金具は全て銀無垢（ぎんむく）で仕上げた豪華な造りである。義宜が歿した翌年の明治 9 年（1876）に、義宜の父で再び尾張家の家督を相続した 17 代慶勝（よしかつ）より、義宜の霊前供養に奉納したことを記す書状が附属する。奉納先は不明だが、後に三輪神社（名古屋市中区）に伝来した。

26 梨子地竹に雀紋散蒔絵糸巻太刀拵

なしじたけにすずめもんちらしまきえいとまきたちごしらえ

江戸時代　19 世紀

糸巻拵とは、柄と鞘の上部を同じ素材の組紐で巻いた太刀拵で、15 世紀中ごろより製作された形式である。鞘には梨子地で表裏に竹に雀紋を 6 個ずつ蒔絵であしらい、金具にも竹に雀紋を散らす。太刀拵は馬上で使用することを目的に、帯取（おびとり）と呼ばれる紐で腰に吊るし、刃は下向きとなる。16 世紀末の桃山時代以降は、主に大名の儀式で使用されるようになり、豪華な造りの拵がつくられるになった。

27 黒漆塗葵紋付刀掛　くろうるしぬりあおいもんつきかたなかけ

江戸時代　19 世紀

上下 2 段に刀を架けられる形式で、中央左右の鏡板（かがみいた）部分に表裏ともに各 1 個の葵紋を蒔絵であしらい、縁を金溜塗（きんだめぬり）とするなど大名調度にふさわしい豪華な造りである。箱蓋の貼り紙に天保 6 年（1835）、「前大納言様」から拝領した刀掛であることが記されている。当時、「前大納言」だったのは、尾張徳川家 10 代斉朝(なりとも)（1793 ～ 1850）と紀伊徳川家 10 代治宝（はるとみ）（1771 ～ 1853）の二人であるため、いずれかの調度と考えられる。

28 刀 銘 備州長船久光 / 文明二二年二月日

かたな めい びしゅうおさふねひさみつ / ぶんめいよねんにがつにち

室町時代　文明 4 年（1472）尾張徳川家 16 代義宜所用

三輪神社・平尾建裕氏寄贈

本作は、尾張藩最後の藩主である 16 代義宜（よしのり）（1858 ～ 75）の歿後に、義宜の神前供養のために奉納された刀で、後に三輪神社（名古屋市中区）に伝来した。附属の拵は太刀拵だが、本作は刀銘できられている。久光は備前国長船（現・岡山県）の刀工で、14 世紀末から 15 世紀初頭にかけて初代が鍛刀し、以後、数代を数える。本作は 4 代目の作と考えられる。

29 朱塗刻鞘刀拵　しゅぬりきざみざやかたなごしらえ

江戸時代　19 世紀　田島浩吉氏旧蔵・田島家寄贈

鞘を朱塗、柄を白糸巻として色の対比をみせ、鞘に海老の胴に似せた刻みを入れる意匠の拵である。鉄丸鍔の縁を金覆輪（きんふくりん）とし、吉祥文様である鶴・亀・松の図を彫る他、目貫（めぬき）に扇、縁（ふち）に羽子板、頭（かしら）に笹羅（ささら）と鼓の楽器、小柄（こづか）に松と橘をあしらうなど、刀装具の意匠にも凝った造りをみせる。石見国（現・島根県）の刀工集団の作と推定される無銘の刀が附属する。

30 脇差 銘（葵紋）越前住下坂上

わきざし めい あおいもん えちぜんじゅうしもさかたてまつる

江戸時代　17 世紀　木子コレクション

越前康継（えちぜんやすつぐ）系統作の脇差である。初代康継は近江国下坂（現・滋賀県）の出で、徳川家康の 2 男・結城秀康（ゆうきひでやす）に抱えられて越前国（現・福井県）に移って鍛刀した。秀康の推挙で家康の下に赴き、家康から「康」の字を授けられ、刀の茎（なかご）に葵紋を切ることが許された。徳川家の御用鍛冶となって扶持を与えられ、江戸と福井を隔年で行き来した。2 代将軍秀忠（ひでただ）にも重用され、「葵下坂」として名声を博した刀工である。

31 脇差 銘 豊州住藤原正行 / 尾州知多郡大草村牛頭天王神前奉納 / 宝暦七丑年三月 山澄河内守龍豊

わきざし めい ほうしゅうじゅうふじわらのまさゆき / びしゅうちたのこおりおおぐさむらごずてんのうしんぜんほうのう ほうりゅくしちうしどしさんがつ やまずみかわちのかみたつとよ

江戸時代　宝暦 7 年（1757）大草村牛頭天王伝来

尾張藩家老山澄河内守龍豊奉納　木子コレクション

豊後国高田（現・大分県）の刀工・正行は、15 世紀初め頃より江戸時代にかけて数代の名が知られる。本作の刀工は市郎右衛門と称した 18 世紀半ば頃の刀工である。本作は、大草（現・愛知県知多市）で 4 千石を領した尾張藩家老・山澄龍豊（1718 ～ 73）が、領内の牛頭天王社（現・大草津島神社）に奉納した脇差である。牛頭天王社は、中世大草城の鬼門除（きもんよ）け社であり、大草城の南西に居館をおいた山澄家も領内鎮護の要とした。

32　短刀 銘 若狭守氏房作 / 天正三年五月日

たんとう めい わかさのかみうじふささく / てんしょうさんねんごがつにち

桃山時代　天正３年（1575）木子コレクション

若狭守氏房は織田信長の御用鍛冶を勤めた刀工である。美濃国関（現・岐阜県）の鍛冶で岐阜城下において鍛刀したと伝わる。本作が作られた天正３年（1575）は、信長は長篠合戦で武田勝頼勢に勝利し、右近衛大将に任じられた年である。子の飛騨守氏房は、信長歿後に尾張国（現・愛知県）を領した豊臣秀次に仕え、相模守正常（さがみのかみまさつね）・伯耆守信高（ほうきのかみのぶたか）とともに「尾張三作」と讃えられる名工となった。

33 線刻革鞘短刀拵　せんこくかわさやたんとうごしらえ

江戸時代　19 世紀　尾張藩士中野家伝来　田島浩吉氏旧蔵・田島家寄贈

拵の鞘は幅の異なる複数の線を刻んだ革製で、赤銅（しゃくどう）の喰出鍔（はみだしつば）は緻密な魚々子地（ななこじ）に幾何学的な唐草文を施し、縁に葵紋の替紋である六葉葵紋をあしらうため、尾張徳川家からの拝領品と推察できる。刀装具として銀板を蛭巻（ひるまき）とした鉄箸が付く。中野家の伝承では、他家での食事の際、箸の銀の変色によって、毒入りか否かを判断したという。研ぎ減りした「短刀銘備州長船則光作文明二年八月日」が附属する。

34 朱漆塗刀箱　しゅうるしぬりかたなばこ

江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

刀の保管・収納箱である。朱漆塗の箱の縁を丸く面取りして黒漆塗にするなど、丁寧な造りの箱で、錠も付けられる。内部は前後に受木（うけぎ）を入れて、二段重ねに刀を収納できる仕組みとなっている。上段に５本、下段に４本の計９本の刀が収納でき、箱身の内面は更紗（さらさ）風の和紙を張る。一回り小さい脇差用の箱もあり、２箱で一対とした。

35 黒漆塗木瓜紋葡萄文蒔絵刀筒

くろうるしぬりもっこうもんぶどうもんまきえかたなづつ

江戸時代　18 世紀

刀袋に入れた刀を収納し、運搬する道具である。鍔（つば）にあたる部分に膨らみをもたせ、被蓋（かぶせぶた）とした刀筒である。先と尻の部分には補強用の真鍮（しんちゅう）金具を被せ、蓋は施錠できる。身と蓋の合口部分に石畳文、所有者の家紋と思われる木瓜紋の他、全体に葡萄文を蒔絵で表す。葡萄文は豊穣を象徴する文様として武家に好まれた文様である。

36 黒漆塗片喰紋散蒔絵刀筒　くろうるしぬりかたばみもんちらしまきえかたなづつ

江戸時代　18 世紀

刀袋に入れた刀を収納し、運搬する道具である。合口蓋（あいくちぶた）とし、蓋は施錠できる。所有者の家紋と思われる片喰紋を大きく蒔絵で施す他、合口部分に梨子地の山形帯を付けて唐草と片喰紋を散らせ、先と尻部分にも水垂れ風に同様の蒔絵を施す。刀筒は、参勤交代などで複数の刀を運搬する大名級武士に特有の道具で、家紋を付ける以外にも文様を蒔絵で装飾した華麗な刀筒も作られた。

特集「刀装具の美」

刀は拵と呼ばれる収納具に納めて携帯される。刃を下にして佩く太刀や、14 世紀以降に登場する刃を上にした「打刀（うちがたな）」、刃長１尺（約 30㎝）以上２尺未満の「脇差（わきざし）」、刃長１尺未満の「短刀」など、それぞれの分類に応じた拵が製作された。

拵と刀身は１本の「目釘（めくぎ）」で固定されているだけである。柄（つか）には持ち手を保護する「鍔（つば）」を装着した。「打刀」や「脇差」の拵には「小柄（こづか）（小刀）」や、髪の乱れを整えた「笄（こうがい）」、柄の飾り金具である「目貫（めぬき）」、「縁（ふち）」・「頭（かしら）」など、様々な刀装具が附属している。

これらの刀装具は精緻な彫りや金銀によって装飾された。拵や刀装具の意匠には、武士の美意識が反映している。

木子（きし）コレクション

名古屋市在住の木子進發氏が蒐集（しゅうしゅう）した刀剣・刀装具コレクションで、刀剣類２６７点（太刀３振・刀

１３６振・脇差１００振・短刀２１振・薙刀２振・長巻（ながまき）１振・槍１本・小刀３振)、拵２０５点（太刀拵５口・刀拵６５口・脇差拵６４口・短刀拵１２口・槍拵１口・薙刀拵２口・長巻拵１口・軍刀拵８口・部品等４７点)、刀装具３６２点（鍔２６４枚・鎺（はばき）２１点・縁及び頭１６組・縁２４点・頭２０点・目貫９点・小柄３点・笄５点）の他、刀剣道具等３１点の総計８６５点に及ぶ一大コレクションである。進發氏の歿後、平成５年(1993)に名古屋市に寄贈された。

37 長柄銚子図小柄・笄　小刀銘 津田遠江守助直
　ながえちょうしずこづか・こうがい
　こがたなめい つだとおとうみのかすけなお
　江戸時代　17 世紀　木子コレクション

38 守口大根図小柄・笄 もりぐちだいこんずこづか・こうがい
　江戸時代　17 ～ 18 世紀　木子コレクション

39 十二支図小柄・笄　小刀銘 手柄山甲斐守正繁
　じゅうにしずこづか・こうがい こがたなめい てがらやまかいのかみまさしげ
　江戸時代　19 世紀　木子コレクション

40 牡丹に二疋獅子図小柄　小刀銘 関兼定
　ぼたんににひきししずこづか　こがたなめい せきかねさだ
　江戸時代　17 世紀　木子コレクション

41 石曳図小柄　いしびきずこづか
　江戸時代　17 ～ 18 世紀　木子コレクション

42 湖上城郭図小柄　小刀銘 青江備中守直次
　こじょうじょうかくずこづか こがたなめい あおえびっちゅうのかみなおつぐ
　江戸時代　17 ～ 18 世紀　木子コレクション

43 花籠図目貫　はなかごずめぬき
　江戸時代　18 世紀　木子コレクション

44 牛図目貫 うしずめぬき
　江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

45 錨縄図目貫　いかりなわずめぬき
　江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

46 蘇鉄葉図縁・頭　そてつはずふち・かしら
　江戸時代　18 世紀　木子コレクション

47 蜻蛉図縁・頭　とんぼずふち・かしら
　江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

48 達磨彫素銅縁・頭 だるまぼりすどうふち・かしら
　江戸時代　19 世紀　木子コレクション

49 宇治川合戦先駆図赤銅鍔　銘 江州彦根住入道宗典製

うじがわかっせんさきがけずしゃくどうつぼ　めい ごうしゅうひこねじゅうにゅうどうそうてんせい
江戸時代　18 世紀　木子コレクション

50 牡丹に蝶図赤銅鍔 銘 夏雄 ぼたんにちょうずしゃくどうつぼ めい なつお
明治時代　19 世紀　木子コレクション

51 高士楼閣図鉄鍔 銘 藻柄子入道宗典製
こうしろうかくずてつつぼ めい もへいしにゅうどうそうてんせい
江戸時代　18 世紀　木子コレクション

52 枝輪透鉄鍔 えだわすかしてつつぼ
江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

53 梅に松葉図銀覆輪鉄鍔 うめにまつばずぎんふくりんてつつぼ
江戸時代　18 ～ 19 世紀　木子コレクション

54 松に関羽図素銅鍔 銘 乗意 まつにかんうずすどうつぼ めい じょうい
江戸時代　18 世紀　木子コレクション

第四章　渡来の技

火薬を用いた武器を日本人が初めて目にしたのは、13 世紀後半の元寇襲来時とされる。元軍が用いた破裂弾は「てつはう」と称された。日本への鉄炮の伝来は、ポルトガル人を乗せた中国船が種子島に漂着した天文 12 年（1543）を最初とするが、それ以前に倭寇（わこう）を通じて伝来していた説もある。

鉄炮伝来以降、各地で火縄銃の生産が行われる中、堺（さかい）（現・大阪府堺市）、国友（くにとも）（現・滋賀県長浜市）、根来（ねごろ）（現・和歌山市）は日本を代表する生産地となった。当初、輸入に頼っていた火薬の原料・硝石（しょうせき）も、やがて国産化に成功する。

弾の装填（そうてん）に時間はかかるものの、破壊力は破格であるため、戦国大名はこぞって鉄炮を保持した。伝来より半世紀ほどで日本は世界有数の鉄炮生産国となったのである。

55　火縄銃 銘（葵紋）仮御筒 芝辻勝右衛門（花押）
ひなわじゅう めい あおいもん かりおんづつ しばつじかつえもん かおう
江戸時代　文化 14 年（1817）

尾張の鉄炮鍛冶による三匁五分筒（さんもんめごふんづつ）である。一匁は５円玉と同じ３．７５グラムで、三匁五分は約１３グラム、口径は約１．４センチとなる。火縄銃は銃身の裏に作者銘を入れるため、解体しなければ銘を見ることは出来ない。銃床は台師（だいし）と呼ばれる職人によって作られ、本作には製作年が墨書されている。筒内で火薬を破裂させて弾を発射するため、筒尻は捻子（ねじ）形式の尾栓（びせん）で塞（ふさ）がれていた。渡来当初、日本に捻子製作の技術はなく、捻子切の技法習得に時間を要したという。

56 火縄銃 金象嵌銘 國友鉄三郎重殖
ひなわじゅう きんぞうがんめい くにともてつさぶろうしげたね
江戸時代　19 世紀

尾張の鉄炮鍛冶による三十五匁筒で、径約２．８センチ・約１３０グラムの弾を発射する。六匁筒ほどが通常装備のため、重量級に分類される筒で、本作は尾張藩の御家流派である尾張田付流（おわりたつけりゅう）で用いられた。尾張田付流は、17 世紀初頭の江戸時代初期に田付兵庫助（ひょうごのすけ）が創始した流派で、尾張藩近習役の炮術として継承された。筒上の手元側に「宿」の字が金象嵌で施されており、密教占術の宿曜道（すくようどう）を表すと考えられる。

57 火縄銃 金象嵌銘 千鈞弩為罷不發機 思無邪

ひなわじゅう きんぞうがんめい せんきんのどはけいそのためにきをはなたず おもいよこしまなし

江戸時代　19 世紀

馬上でも扱えるように銃身を短くした銃で、馬上筒とも称される。銃身には牡丹唐草文と、『三国志 魏書（ぎしょ）杜襲伝（としゅんでん）』の「千鈞弩為鐹不發機」、『詩経』の「思無邪」の教訓を金象嵌で施している。前者は「ちいさな鼠に対して強力な武器を使用することはない」、すなわち、小さなことを大げさに扱うことなく柔軟に対応しなければ、無駄や間違いが多くなるという喩えであり、後者は「私心なく公平である」との意で、所有者の座右銘（ざゆうめい）を記したと思われる。

58 指火式火矢筒　さしびしきひやづつ

江戸時代　19 世紀

五十匁（約 187.5 グラム）を超える重量級の弾を発射する大筒である。抱えて発射することもできるが、火薬点火による衝撃が大きいため、地面に置く場合もある。通常の火縄銃と同様に銃口より弾と火薬を入れる形式だが、発火装置は無く銃身の上に開けられた火門（かもん）に直接火種を押し付けて点火する。

59 烏口革弾入・革袋弾入　からすぐちかわたまいれ・かわぶくろたまいれ

江戸時代　19 世紀

火縄銃の弾を入れて携行する容器である。径約１．３～１．４センチの三匁五分弾が附属する。烏の嘴（くちばし）のような象牙製の挟み口を付けて、弾一つを取り出しやすい形状の弾入を烏口という。

60 木砲　もくほう

江戸時代　19 世紀

桜・松のように腐りにくい材質の丸木を刳（く）り貫き、竹などを巻いて補強した木製の大砲である。矢状の筒に火薬を詰めた棒火矢（ぼうひや）を飛ばす程度の効果しかなかったと思われるが、ペリー来航以降、海岸防備による台場建設が各地で行われると、不足する金属製筒の代用で配置される例もあった。現在でも古式の打ち上げ花火、手筒花火などで使用されている。

西の丸御蔵城宝館企画展

# 「武家の備え」

出品目録

会期：令和4年1月1日（土）～4月10日（日）

江戸時代の武士は、常に戦の準備を怠りなく務め、さまざまな戦道具を準備していました。戦は武士の名誉と誇りを示す場であり、手柄は武家世界での地位と立場を決定します。戦場での活躍を示すため、武家の道具は実用的であると同時に、身分・格式に応じた威勢も示されました。本展では、名古屋城コレクションの中から、戦道具の優品を選び、備えの機能と意匠の美を紹介します。

展示期間　A：1/1～2/18　B：2/19～4/10　C：1/1～1/31　D：2/1～3/4　E：3/5～4/10

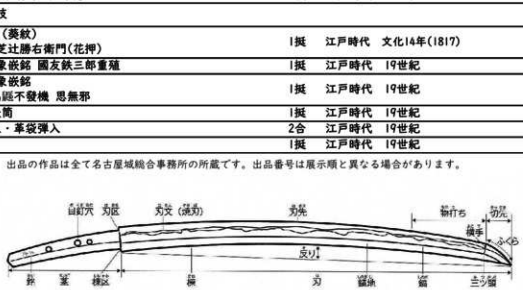
| 名称 | 作者・所用者 | 員数 | 製作年代 | | 備考 | 展示期間 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **第一章　弓馬の道** | | | | | | |
| 1 黒漆塗重藤弓 | 村上源一作 | 1張 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 2 鏃 | | 14本 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 3 黒革漆塗丸十字紋付箙・征矢 | | 1腰 | 江戸時代 | 19世紀 | | A |
| 4 黒漆塗葵紋蒔絵靫 | | 1腰 | 江戸時代 | 17-18世紀 | | B |
| 5 金箔貼土俵空穂 | | 1腰 | 江戸時代 | 18-19世紀 | | |
| 6 白革葵紋付鞦 | 尾張徳川家16代義宜所用 | 1対 | 江戸時代 | 19世紀 | 三輪神社・平成城名電鐵 | |
| 7 七曜紋付獅子牡丹文蒔絵鞍 | 家守作・大垣藩家老戸田種之助所用 | 1具 | 江戸時代 | 寛文6年(1666) | | |
| 8 菊に流水・幾何文象嵌鐙 | 下村重久作 | 1具 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 9 赤銅轡 | | 1本 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 10 槍拵 | | 4本 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 11 鼓形穂先槍拵 | | 1本 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| **第二章　戦陣の装い** | | | | | | |
| 12 沢瀉威二枚胴具足 | 名古屋東照宮伝来 | 1具 | 江戸時代 | 18世紀 | | |
| 13 銀覆輪黒漆塗丸に九曜紋・月齢軸文軍配 | 新庄藩戸沢家伝来 | 1握 | 江戸時代 | 17-18世紀 | | |
| 14 「勘」字陣太鼓 | 三輪卯左衛門所用 | 1台 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 15 黒漆塗桃実形兜 | | 1頭 | 江戸時代 | 17世紀 | | |
| 16 鉄錆地越中頭形兜 | | 1頭 | 江戸時代 | 17世紀 | | |
| 17 黒漆塗鳥帽子形兜 | | 1頭 | 江戸時代 | 17世紀 | | |
| 18 銀陀美蜻形兜 | | 1頭 | 江戸時代 | 17世紀 | | |
| 19 網代貼笈形具足櫃 | | 1合 | 江戸時代 | 18～19世紀 | | |
| 20 法螺貝 | 小田原藩士有浦元左衛門所用 | 1口 | 江戸時代 | 18世紀 | | |
| 21 白羅紗地桐紋付陣羽織 | 伝豊臣秀吉・溝口秀勝所用 | 1領 | 桃山時代 | 16世紀 | | C |
| 22 紺羅紗地葵紋付陣羽織 | 尾張徳川家16代義宜所用 | 1領 | 江戸時代 | 19世紀 | 三輪神社・平成城名電鐵 | D |
| 23 紫羅紗地鶴丸紋付陣羽織 | 尾張藩家老石河家伝来 | 1領 | 江戸時代 | 19世紀 | | E |
| **第三章　武士の魂** | | | | | | |
| 24 太刀 銘 備州長船住法光造/永正十二年八月廿七日/所持 根津右衛門 | 根津右衛門所用 | 1振 | 室町時代 | 永正12年(1515) | 木子コレクション | |
| 25 梨子地葵紋散蒔絵太刀拵 | 尾張徳川家16代義宜所用 | 1口 | 江戸時代 | 19世紀 | 三輪神社・平成城名電鐵 | A |
| 26 梨子地竹に雀紋蒔絵糸巻太刀拵 | | 1口 | 江戸時代 | 19世紀 | 木子コレクション | B |
| 27 黒漆塗葵紋蒔絵刀掛 | | 1基 | 江戸時代 | 19世紀 | | |
| 28 刀 銘 備州長船久光/文明二二年二月日 | 尾張徳川家16代義宜所用 | 1振 | 室町時代 | 文明４年(1472) | 三輪神社・平成城名電鐵 | |
| 29 朱塗刻鞘刀拵 | | 1口 | 江戸時代 | 19世紀 | 神風寺宝丸美術館・神風寺電鐵 | |
| 30 脇差 銘（葵紋）越前住下坂上 | | 1振 | 江戸時代 | 17世紀 | 木子コレクション | |
| 31 脇差 銘 豊州住藤原正行/尾州知多郡大草村牛頭天王神前奉納/宝暦七丑年三月 | 大草村牛頭天王社伝来<br>尾張藩家老山澄龍豊奉納 | 1振 | 江戸時代 | 宝暦7年(1757) | 木子コレクション | |
| 32 短刀 銘 若狭守氏房作/天正三年五月日 | | 1振 | 桃山時代 | 天正3年(1575) | 木子コレクション | |
| 33 線刻革鞘短刀拵 | 尾張藩士中野家伝来 | 1口 | 江戸時代 | 19世紀 | 神風寺宝丸美術館・神風寺電鐵 | |
| 34 朱漆塗刀箱 | | 1合 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション | |
| 35 黒漆塗木瓜紋葡萄文蒔絵刀箪 | | 1合 | 江戸時代 | 18世紀 | | |
| 36 黒漆塗片喰紋散蒔絵刀箪 | | 1合 | 江戸時代 | 19世紀 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| **特集「刀装具の美」** | | | | | |
| 37 長柄銃子図小柄・笄 | 小刀銘 津田遠江守助直 | 1具 | 江戸時代 | 17世紀 | 木子コレクション |
| 38 守口大根図小柄・笄 | | 1具 | 江戸時代 | 17-18世紀 | 木子コレクション |
| 39 十二支図小柄・笄 | 小刀銘 手柄山甲斐守正繁 | 1具 | 江戸時代 | 19世紀 | 木子コレクション |
| 40 牡丹に二足獅子図小柄 | 小刀銘 関兼定 | 1本 | 江戸時代 | 17世紀 | 木子コレクション |
| 41 石鬼図小柄 | | 1本 | 江戸時代 | 17-18世紀 | 木子コレクション |
| 42 湖上城郭図小柄 | 小刀銘 青江備中守直次 | 1本 | 江戸時代 | 17-18世紀 | 木子コレクション |
| 43 花籠図目貫 | | 1対 | 江戸時代 | 18世紀 | 木子コレクション |
| 44 牛図目貫 | | 1対 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション |
| 45 錨縄図目貫 | | 1対 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション |
| 46 蘇鉄葉図縁・頭 | | 1対 | 江戸時代 | 18世紀 | 木子コレクション |
| 47 蜻蛉図縁・頭 | | 1対 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション |
| 48 達磨彫素銅縁・頭 | | 1対 | 江戸時代 | 19世紀 | 木子コレクション |
| 49 宇治川合戦先駆図赤銅鍔<br>銘 江州彦根住入道宗典製 | | 1枚 | 江戸時代 | 18世紀 | 木子コレクション |
| 50 牡丹に蝶図赤銅鍔 銘 夏雄 | | 1枚 | 明治時代 | 19世紀 | 木子コレクション |
| 51 高士楼閣図鉄鍔 銘 藩柄子入道宗典製 | | 1枚 | 江戸時代 | 18世紀 | 木子コレクション |
| 52 枝輪透鉄鍔 | | 1枚 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション |
| 53 梅に松葉図銀覆輪鉄鍔 | | 1枚 | 江戸時代 | 18-19世紀 | 木子コレクション |
| 54 松に関羽図素銅鍔 銘 乗意 | | 1枚 | 江戸時代 | 18世紀 | 木子コレクション |
| **第四章　渡来の技** | | | | | |
| 55 火縄銃 銘（葵紋）<br>仮御筒 芝辻勝右衛門（花押） | | 1挺 | 江戸時代 | 文化14年(1817) | |
| 56 火縄銃 金象嵌銘 國友鉄三郎重殖 | | 1挺 | 江戸時代 | 19世紀 | |
| 57 火縄銃 金象嵌銘<br>千釣弩為鏃不發機 思無邪 | | 1挺 | 江戸時代 | 19世紀 | |
| 58 指火式火矢筒 | | 1挺 | 江戸時代 | 19世紀 | |
| 59 鳥口革弾入・革袋弾入 | | 2合 | 江戸時代 | 19世紀 | |
| 60 木砲 | | 1挺 | 江戸時代 | 19世紀 | |

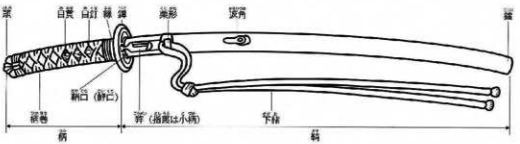
出品の作品は全て名古屋城総合事務所の所蔵です。出品番号は展示順と異なる場合があります。

## 刀図解

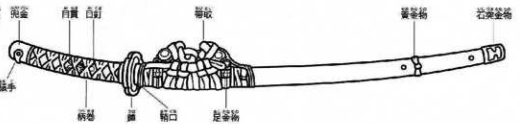
### 刀




### 刀拵



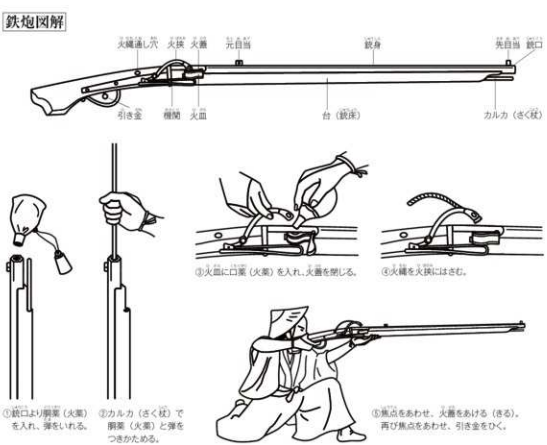
### 糸巻太刀拵



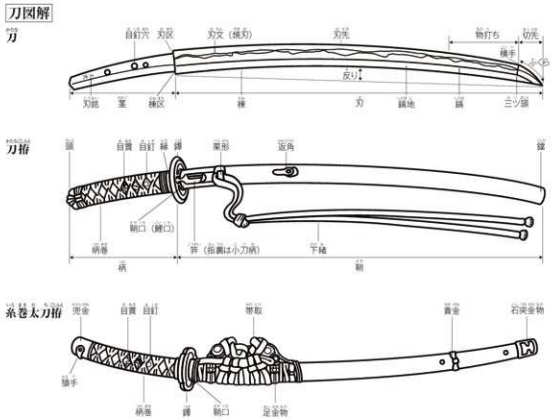
チラシ

展示装飾

〈パネル〉




鉄砲図解パネル




刀図解パネル

展示室風景

## 2　その他

### （1）名古屋城刀剣展－尾張に伝わる刀剣－

概要

「尾張に伝わる刀剣」をテーマに、歴史的・美術史的にも貴重な刀剣を展示。

主催

日本美術刀剣保存協会名古屋支部、名古屋城総合事務所

展示資料等

| 展示期間 | 展示場所 | 展示資料 | 点数 | 来場者数※ |
|---|---|---|---|---|
| 令和３年（2021）<br>９月 11 日（土）～<br>９月 26 日（日） | 復原本丸御殿内<br>孔雀之間 | 1 刀　無銘　来國次<br>2 刀　無銘　長船光忠<br>3 刀　銘　備前長船住兼光<br>4 刀　銘　生駒雅楽頭公依御意兼明造之<br>／文禄元歳二月吉日　谷出羽<br>守二胴切<br>5 脇指　銘　陸奥守大道作<br>／大縄監物義辰<br>6 脇指　銘　出羽大掾藤原國路<br>（徳善院貞宗写）<br>7 脇指　銘　相模守政常入道<br>8 太刀　銘　青木照之進元長彫之<br>／文政十二己丑年春吉日 | 8 点 | 9,927 人 |

※来場者数は会期中における本丸御殿孔雀之間の入場者数。

# Ⅳ　教育普及事業

## 1　刊行物

### （1）名古屋城調査研究センター研究紀要　第３号

概要

名古屋城調査研究センターにおける研究成果を公開するため、『名古屋城調査研究センター研究紀要』を刊行した（令和４年３月発行）。

目次


| | |
|---|---|
| 名古屋城築城考・普請編 | 服部英雄 |
| 江戸城、そして名古屋城の鯱 | 朝日美砂子 |
| 江戸時代の名古屋城と城下町の観光 | 石田泰弘<br>種田祐司 |
| 〈史料紹介〉和光山天沢院長福寺所蔵の桶狭間合戦関係資料 | 原史彦 |
| 〈展示報告〉西の丸御蔵城宝館開館記念特別展「名古屋城誕生！」 | 木村慎平 |
| 〈展示報告〉西の丸御蔵城宝館　プレオープン特別企画 | |
| 「鯱展」―今だから　鯱（さち）は舞いおり　あなたによりそう | 朝日美砂子 |
| 名古屋城二之丸出土のれんがについて | 佐藤公保 |
| 〈研究ノート〉近世尾張地域の軒平・軒桟瓦に関する情報整理<br>―文様編年について― | 濵崎健 |
| 名古屋城跡石垣における矢穴形状の基礎的検討 | 二橋慶太郎 |
| 名古屋城の水環境―本丸の排水環境について― | 木村有作 |


### （2）名古屋城調査研究センターだより　第３号

概要

名古屋城調査研究センターの活動を広く市民に周知するためのリーフレットとして、『名古屋城調査研究センターだより』を刊行した（令和４年３月発行）。

目次


| | |
|---|---|
| 西の丸御蔵城宝館オープン | 原史彦 |
| 〈西の丸御蔵城宝館特別展　逸品紹介①〉名古屋城の鯱 | 朝日美砂子 |
| 〈西の丸御蔵城宝館特別展　逸品紹介②〉<br>五条橋の擬宝珠はいくつあったのか？ | 木村慎平 |
| 〈考古資料担当より〉名勝名古屋城二之丸庭園の発掘調査 | 花木ゆき乃 |


### （3）西の丸御蔵城宝館開館記念特別展「名古屋城誕生！」リーフレット

概要

令和３年11月１日（月）～12月19日（日）に開催された西の丸御蔵城宝館開館記念特別展「名古屋城誕生！」の内容・出陳作品を紹介するリーフレットを刊行した（令和３年11月１日発行）。

### （4）史料が語る　名古屋城石垣普請の現場〔名古屋城調査研究報告書３・資料調査研究報告書１〕

概要

令和３年12月９日（木）に開催されたシンポジウム「史料が語る　名古屋城石垣普請の現場」の成果を報告書として刊行した（令和４年３月発行）。

同シンポジウムでは、名古屋城築城時の石垣普請について、近年新たに発見された史料などを基に議論が行われた。

### （5）名古屋城調査研究センター年報２　令和２年度

令和２年度の名古屋城調査研究センターの活動実績を示す年報を刊行した（令和４年〔2022〕３月発行）。

## 2　レファレンス

名古屋城調査研究センターでは、市民からの質問のうち、特に名古屋城の文化財・歴史に係るものについて回答を行っている。令和３年度は合計で５件の問い合わせがあり、内訳としては、石垣をはじめとした名古屋城内の記念物に関する質問が多かった。

| 内容 | 件数 |
|---|---|
| 記念物（特別史跡・名勝・天然記念物）に関すること（石垣、二之丸庭園など） | 3 件 |
| 建造物に関すること（天守・本丸御殿など） | 1 件 |
| 資料等の確認依頼 | 1 件 |
| 合計 | 5 件 |

## 3　シンポジウム・座談会

### （1）シンポジウム「史料が語る　名古屋城石垣普請の現場」

開催日時　令和３年12月９日（木）

開催場所　YouTube にて動画配信

主催　名古屋城調査研究センター、熊本大学永青文庫研究センター

概要

名古屋城築城時の石垣普請について、近年新たに発見された史料などを基に議論を行った。名古屋城調査研究センターからは服部英雄、堀内亮介が基調講演・報告を行い、木村慎平が司会を務めた。

プログラム・報告者

基調講演「名古屋城の築城」　服部英雄（名古屋城調査研究センター所長）

研究報告

研究報告①「『名古屋御城石垣絵図』をよむ」　及川亘氏（東京大学史料編纂所准教授）

研究報告②「名古屋城石垣普請における扶持米給付
―扶持米請取状の分析を中心に」　堀内亮介（名古屋城調査研究センター学芸員）

研究報告③「細川忠興・忠利父子の名古屋城石垣普請」　後藤典子氏（熊本大学永青文庫研究センター特別研究員）

コメント　稲葉継陽氏（熊本大学永青文庫研究センター長）

ディスカッション

司会：木村慎平（名古屋城調査研究センター学芸員）

動画収録の様子

（2）座談会「名古屋城本丸御殿障壁画≪雪中梅竹鳥図≫の復元から考える
～文化財の「復元」とは？歴史資料から何が読み取れるか？～」

開催日時　令和４年１月 26 日（水）
開催場所　名古屋城　本丸御殿孔雀之間
主催　名古屋城調査研究センター、一般社団法人環境創造研究センター（共催：中部大学）
概要
名古屋城の資料を主に事例として取り上げ、絵画や絵図といった歴史資料に描かれた動植物などの「自然」から、古環境や文化をはじめ何を読み取ることができるのか、そもそも文化財を「復元する」とはどのような行為であるのか等について、議論を行った。名古屋城調査研究センターからは服部英雄、村木誠、木村慎平が登壇し、意見交換を行った。
プログラム
１．名古屋城本丸御殿障壁画「雪中梅竹鳥図」の復元を巡って
２．文化財の「復元」について
３．文化財、歴史資料から何が読み取れるか？読み取るべきか？
登壇者
涌井史郎氏（なごや環境大学学長）
服部英雄（名古屋城調査研究センター所長）
北本朝展氏（国立情報学研究所教授）
村木誠（名古屋城調査研究センター副所長）
木村慎平（名古屋城調査研究センター学芸員）

（3）シンポジウム「石垣が語る東海のお城」

開催日時　令和４年３月１９日（土）
開催場所　Zoom ウェビナーによる Web 開催
主催　名古屋城総合事務所
概要
名古屋城で近年実施している石垣の外観調査及び発掘調査の成果を中心に東海地域における他城郭の調査事例について、調査報告会を実施した。名古屋城調査研究センターからは服部英雄、村木誠、西本業由、二橋慶太郎が出席・報告し、加えて岡崎市教育委員会社会教育課の山口遥介氏にご協力いただき、岡崎城の事例を紹介していただいた。

プログラム・報告者

「名古屋城の石垣調査」　二橋慶太郎（名古屋城調査研究センター学芸員）

「名古屋城の発掘調査」　西本茉由（名古屋城調査研究センター学芸員）

コメント　服部英雄（名古屋城調査研究センター所長）

事例報告（岡崎城）　山口遥介氏（岡崎市社会教育課）

## 4　講師派遣

| 年月日 | 題目 | 主催者 | 講師 |
|---|---|---|---|
| 令和３年（2021）<br>７月２日（金） | 令和３年度第 34 回埋蔵文化財調査研究会 | 愛知県埋蔵文化財調査センター | 木村有作 |
| 令和３年<br>７月 17 日（土） | 小牧市歴史文化基礎講座 | 愛知文教大学 | 原史彦 |
| 令和３年<br>10 月 17 日（日） | AGGN2021 年度第３回研修会「オンライン講演会」 | NPO 法人愛知善意ガイドネットワーク | 原史彦 |
| 令和３年<br>10 月 23 日（土） | やっとかめ文化祭 | やっとかめ文化祭実行委員会 | 木村有作 |
| 令和３年<br>11 月７日（日） | 熱田湊まちづくり協議会主催勉強会 | 熱田湊まちづくり協議会 | 原史彦 |
| 令和３年<br>11 月 14 日（日） | 愛知県史跡整備市町村協議会 30 周年記念講演・報告会 | 愛知県史跡整備市町村協議会 | 西本茉由 |
| 令和３年<br>11 月 21 日（日） | 愛知芸大芸術講座『第６回災害と文化財「長久手にまつわる文化財」』 | 愛知県立芸術大学 | 原史彦 |
| 令和３年<br>11 月 25 日（木） | テクノプラザナゴヤ９０定例会 | テクノプラザナゴヤ９０ | 木村慎平 |
| 令和４年（2022）<br>１月 15 日（土） | 水南公民館文化部講座 | 瀬戸市水南公民館 | 原史彦 |
| 令和４年<br>１月 19 日（水） | 名古屋市中生涯学習センター令和３年度後期主催講座 | 名古屋市中生涯学習センター | 木村慎平 |
| 令和４年<br>１月 24 日（月） | 一般社団法人名古屋ビルヂング協会講演 | 一般社団法人名古屋ビルヂング協会 | 木村有作 |
| 令和４年<br>１月 28 日（金） | 名古屋市立高等学校地理歴史研修講座 | 名古屋市教育委員会 | 二橋慶太郎 |
| 令和４年<br>２月５日（土） | 水南公民館文化部講座 | 瀬戸市水南公民館 | 原史彦 |
| 令和４年<br>２月 11 日（金・祝） | ふるさと全国お城サミット開催前記念イベント ～お城の魅力発見～ | ふるさと全国県人会まつり実行委員会 | 村木誠<br>原史彦 |
| 令和４年<br>３月 18 日（金） | 国際芸術祭「あいち 2022」ラーニング・プログラム 愛知と世界を知るためのリサーチ「ＭＡ・ＲＵ・ＧＯ・ＴＯ あいち feat. 三英傑」 | 国際芸術祭「あいち」組織委員会 | 木村慎平 |

※当センター職員を職務の一環として派遣したもののみ掲載（名古屋城総合事務所（名古屋城調査研究センター含む）が主催又は主催として含むものを除く。）。

# V　組織と職員

［令和４年（2022）３月31日現在］

## 1　組織

- 所長（非常勤）
  - 副所長
    - 調査研究係長
      - 主事 1
      - 学芸員 12
      - 会計年度名古屋城調査研究事務員 3
      - 会計年度名古屋城学芸事務員 2
      - 会計年度時給制業務補助員 3
    - 主査（近世武家文化の調査・研究等）
    - 主査（併任）（石垣の調査・研究）

## 2　職員

| | |
|---|---|
| 所　長（非常勤） | 服部　英雄 |
| 副所長 | 村木　誠 |
| 主　査<br>〈近世武家文化の調査・研究等〉 | 原　史彦 |
| 主　査（併任）<br>〈石垣の調査・研究〉 | 深谷　淳（～ 4.3.31） |
| 調査研究係長 | 小村　拓也（3.4.1 ～） |
| 主事 | 駒田　智子（3.4.1 ～） |
| 学芸員 | 朝日　美砂子 |
| | 酒井　将史 |
| | 木村　慎平（～ 4.3.31） |
| | 近藤　将人（～ 4.3.31） |
| | 木村　有作（～ 4.3.31） |
| | 西本　茉由 |
| | 花木　ゆき乃 |
| | 堀内　亮介 |
| | 二橋　慶太郎 |
| | 濵崎　健 |
| | 高橋　圭也 |
| | 大村　陸　（3.4.1 ～） |
| 会計年度名古屋城調査研究事務員 | 佐藤　公保（～ 4.3.31） |
| | 種田　裕司 |
| | 大西　健吾 |
| 会計年度名古屋城学芸事務員 | 鶴見　沙耶伽 |
| | 近藤　直樹　（3.7.1 ～） |
| 会計年度時給制業務補助員 | 三輪　恵子（3.10.1 ～ 4.3.31） |
| | 間中　裕美子（3.11.1 ～ 4.3.31） |
| | 山本　貴子（3.12.1 ～ 4.3.31） |

# Ⅵ　参考資料

## 1　名古屋城の活動

### （1）催事等

| 会期 | 事項 |
|---|---|
| 令和３年（2021）４月16日（金）～５月９日（日） | 西の丸御蔵城宝館 プレオープン特別企画「鯱展」 |
| 令和３年（2021）８月７日（土）～８月15日（日） | 名古屋城夏まつり |
| 令和３年（2021）８月７日（土）～８月15日（日） | 重要文化財「西南隅櫓」特別公開 |
| 令和３年（2021）10月23日（土）～11月28日（日） | 名古屋城秋のおもてなし |
| 令和３年（2021）10月24日（日）～11月23日（火・祝） | 第74回 名古屋城菊花大会 |
| 令和３年（2021）10月31日（日）～11月３日（水・祝） | 茶席特別公開 |
| 令和３年（2021）10月30日（土）～11月７日（日） | 重要文化財「西南隅櫓」「東南隅櫓」特別公開 |
| 令和３年（2021）11月１日（月）～12月19日（日） | 西の丸御蔵城宝館開館記念特別展<br>「名古屋城誕生！」 |
| 令和３年（2021）11月３日（水・祝）～11月７日（日） | 茶席特別公開 |
| 令和４年（2022）１月１日（土・祝）～１月10日（月・祝） | 名古屋城冬まつり |
| 令和４年（2022）１月１日（土・祝）～４月10日（日） | 西の丸御蔵城宝館企画展「武家の備え」 |
| 令和４年（2022）１月２日（日）～１月10日（月・祝） | 重要文化財「東南隅櫓」特別公開 |
| 令和４年（2022）３月５日（土）～３月14日（月） | 第48回 名古屋城つばき展 |
| 令和４年（2022）３月19日（土）～５月５日（木・祝） | 名古屋城春まつり |
| 令和４年（2022）３月26日（土）～４月３日（日） | 重要文化財「西南隅櫓」特別公開 |

### （2）特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

| 年 | 月日 | 会議名称※ |
|---|---|---|
| 令和３年<br>(2021) | ５月７日 | 第39回　全体整備検討会議 |
| | ６月１日 | 第42回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | ６月４日 | 第40回　全体整備検討会議 |
| | ７月９日 | 第41回　全体整備検討会議 |
| | ７月14日 | 第43回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | ７月16日 | 第23回　天守閣部会 |
| | ７月17日 | 第26回　庭園部会 |
| | ７月19日 | 第27回　建造物部会 |
| | ８月６日 | 第42回　全体整備検討会議 |
| | ８月23日 | 第27回　庭園部会 |
| | ８月25日 | 第44回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | ９月３日 | 第43回　全体整備検討会議 |
| | 10月１日 | 第44回　全体整備検討会議 |
| | 10月29日 | 第45回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | 11月５日 | 第45回　全体整備検討会議 |
| | 12月10日 | 第46回　全体整備検討会議 |
| | 12月19日 | 第28回　庭園部会 |

| | | |
|---|---|---|
| 令和４年<br>(2022) | １月 14 日 | 第 28 回　建造物部会 |
| | １月 25 日 | 第 46 回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | １月 30 日 | 第 29 回　庭園部会 |
| | ２月 17 日 | 第 47 回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | ２月 21 日 | 第 29 回　建造物部会 |
| | ３月４日 | 第 47 回　全体整備検討会議 |
| | ３月 21 日 | 第 30 回　庭園部会 |
| | ３月 24 日 | 第 48 回　石垣・埋蔵文化財部会 |
| | ３月 31 日 | 第 48 回　全体整備検討会議 |

※各部会の正式名称には部会名称の前に「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」が付されるが、煩雑になるため省略した。同様に全体整備検討会議についても「特別史跡名古屋城跡」を省略した。

## ２　入場者数の推移

（単位：人）

| 月 | 平成 30 年度 | 令和元年度※1 | 令和２年度※2 | 令和３年度※3 |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 274,267 | 282,561（147,842） | 10,775（0） | 65,849（31,621）<br>〈5,049〉 |
| 5 | 221,242 | 226,278（134,526） | 199（0） | 31,777（17,300）<br>〈6,528〉 |
| 6 | 142,269 | 139,213（111,996） | 21,208（13,732） | 14,819（11,279） |
| 7 | 127,839 | 134,635（108,517） | 30,302（26,228） | 41,449（23,658） |
| 8 | 221,923 | 222,148（134,832） | 25,423（23,228） | 58,529（24,076） |
| 9 | 150,171 | 166,354（116,789） | 46,333（30,065） | 27,122（16,402） |
| 10 | 196,819 | 189,577（118,772） | 55,784（44,090） | 56,547（32,998） |
| 11 | 203,670 | 210,298（131,809） | 90,109（61,874） | 105,035（42,274）<br>〈30,610〉 |
| 12 | 141,475 | 129,109（84,350） | 31,957（29,173） | 65,340（36,713）<br>〈14,265〉 |
| 1 | 143,520 | 170,855（101,728） | 20,559（17,183） | 59,678（30,475）<br>〈17,230〉 |
| 2 | 146,417 | 120,341（80,447） | 25,942（16,597） | 37,470（22,138）<br>〈10,382〉 |
| 3 | 237,918 | 44,902（0） | 165,021（53,250） | 123,690（50,791）<br>〈23,409〉 |
| 計 | 2,207,530 | 2,036,271（1,271,608） | 523,612（315,420） | 687,305（339,725）<br>〈107,473〉 |

※１　（　）内は本丸御殿入場者数。令和２年２月 29 日（土）から同年４月９日（木）までの間、本丸御殿入場休止。

※２　（　）内は本丸御殿入場者数。令和２年４月 10 日（金）から同年５月 31 日（日）までの間、名古屋城開園休止。５月 29 日（金）のみ開園再開。

※３　令和３年４月 16 日（金）から同年６月 20 日（日）までの間、土日のみ名古屋城開園休止。
〈　〉内は西の丸御蔵城宝館の入館者数。令和３年４月 16 日（金）から５月９日（日）までの間、プレオープン。令和３年 11 月１日（月）開館。

名古屋城調査研究センター年報３
令和３年度
２０２２年１１月

発行　名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター
〒460-0031 名古屋市中区本丸１番１号
TEL（052）231-2481